

平成25年度名古屋大学大学院文学研究科

学位（課程博士）申請論文

事態連鎖から見たインドネシア語における ter-構文の働き

—受動から外れる「結果状態」を表す ter-構文

名古屋大学大学院文学研究科

人文学専攻言語学専門

RIZKI ANDINI

平成26年3月

## 目次

### 事態連鎖から見たインドネシア語における ter-構文の働き —受動から外れる「結果状態」を表す ter-構文—

#### 目次

#### 第1章 インドネシア語のしくみ

1. インドネシア語について.....4
2. 接辞の組み合わせの構造について
  - 2.1 meN-自動詞と meN-他動詞の区別.....5
3. 研究の動機.....6
4. 本研究の構成.....7

#### 第2章 ヴォイスの観点から見た日本語との対照におけるインドネシア語のヴォイスと受動

1. ヴォイスについて
  - 1.1 言語学大辞典 (1996) .....8
  - 1.2 仁田義雄 (1981) .....9
  - 1.3 柴谷方良 (1982) .....9
  - 1.4 Martin Haspelmath (1990) .....10
  - 1.5 村木新次郎 (1991) .....10
  - 1.6 佐藤琢三 (2005) .....11
2. 受動の定義について
  - 2.1 類型論から見た受動の定義.....12
  - 2.2 類型論から見た受動の一般化.....13

#### 第3章 インドネシア語と日本語の受動

1. 日本語の受動
  - 1.1 松下三次郎 (1928) (1930) .....16
  - 1.2 井上和子 (1976) 黒田成幸 (1979) .....17

1.3 益岡隆志 (1982) (1987) .....	18
1.4 工藤真由美 (1990) .....	19
2. インドネシア語の受動	
2.1 di-受動 .....	20
2.2 田中真理 (1991) .....	25
2.3 湯浅彰子 (2003) .....	26
2.4 日本語との対照におけるインドネシア語のその他の受動表現 .....	30
3. 先行研究の問題 .....	31

#### 第4章 結果状態から見た ter-構文

1. 動詞の種類と ter-構文の分布 .....	33
2. 3つの受動の機能ドメイン .....	34
3. 受動の機能ドメインから見た ter-構文 (di-構文との比較)	
3.1 impersonalization 機能ドメイン .....	35
3.2 detransitivization (自動詞化) 機能ドメイン	
3.2.1 動詞分類 .....	36
3.2.2 「結果状態」の ter-構文 .....	41
4. ter-動詞の Target State と Resultant State .....	44
5. まとめ .....	47

#### 第5章 ter-構文と「はたらきかけ」・「結果」の相関

1. di-構文と関連する ter-構文における「はたらきかけ」と「結果」.....	49
2. di-構文と交替可能3つの ter-構文	
2.1 di-kan 構文としか交替できない「ter-構文タイプ1」.....	51
2.2 di-構文と交替できる「ter-構文タイプ2」 .....	53
2.3 di-構文でも di-kan 構文でも交替できる「ter-構文タイプ3」 .....	54
3. Affectedness「影響性」が強い ter-構文 .....	55
4. ter-構文と”kena”の関係	
4.1 “kena”を含意している ter-構文 .....	60
4.2 “kena”を含意していない ter-構文 .....	63
4.3 Strict Morphological Passive.....	63
5. まとめ.....	64

第 6 章 結論.....	65
参考文献.....	67

# 第1章

## インドネシア語のしくみ

### 1. インドネシア語について

東・東南アジアには、主な語族・語派が六つある（オーストロネシア語族、モン・クメール語族、タイ・カダイ語族、チベット・ビルマ語派、シナ・チベット語派、そしてモン・ミエン語派）。起源の観点から、東・東南アジアの言語はヨーロッパよりもはるかに多様である。

そのうちオーストロネシア語族は千前後の言語から構成され、西はマダガスカル島から東はイースター島まで、北は台湾・ハワイから南はニュージーランドまでと非常に広く分布している。話者が最も多いのはインドネシア共和国である。

インドネシア共和国は、2013年現在約2億3千万人（予測、世界第4位）（Tempo誌、2011年）の人口をもつ、東南アジアの群島国家である。文化の異なる多様な民族が住んでおり、地域や島ごとに異なる地域固有の言語が話されている。インドネシア語はこの多民族国家インドネシアを一つにする重要な言語である。

インドネシア語はマレー語をもとにして人工的に作られた言語であり、各地域にはジャワ語、スンダ語、マドゥラ語、ミナンカバウ語、バリ語、ブギス語、マカッサル語、アチェ語などが分布している。

インドネシア語の語彙にはサンスクリット語、アラビア語、ポルトガル語、オランダ語などに由来する外来語が非常に数多く見られる。これは、インドネシアの歴史が、海を通じて仏教文化、ヒンドゥー文化、イスラム文化、また植民地支配を受けた時代には宗主国オランダをはじめとする西欧諸国の文化の影響を受け続けた結果である。

### 2. 接辞の組み合わせの構造について

インドネシア語の動詞には、その形態から語基動詞（単純動詞）と派生動詞の二種がある。前者は語基そのものが動作、過程、状態や知覚などの意味をもつ。派生動詞をつくるにはその構成成分となる形態素が必要であり、それには自由語基、拘束語基と動詞を形成しその性格を決定する接辞がある。

動詞にはその動作主体とそれを受けるものとの相関関係を表す、つまり原則として目的語を必要とする他動詞と、その関係を必要としない自動詞があることは一般的に認め

られているが、インドネシア語でも同様である。インドネシア語ではその形態から他動詞であることが明白なもの（di-接頭辞、memper-接頭辞、diper-接頭辞、-kan 接尾辞、-i 接尾辞を伴っているものなど）と、そうでないものがあるが、後者は形態のみからでは自他の区別を判定しにくいものが多い（松岡 1990、Harimurti 2008）。

本論文では、受動に関わる di-、ter-接頭辞に対応するのが能動を表す meN-<sup>1</sup>接頭辞であると主張する。meN-接頭辞は、他の接頭辞と違い、形態からの判断だけでは、自動詞、他動詞いずれもの可能性も持つため、見分けることはできない。meN- 接頭辞は拘束語基（そのほとんどは動作や行為などを表す潜在的意味をもち、動詞的性格が強い）と動詞以外の語基を動詞化<sup>2</sup>し、語基がもともと動詞の場合は品詞転換することなく、共に動詞の標準型を形成する機能がある。meN-接頭辞の基本的な働きの動詞化は、例えば日本語で「上陸する、コピーする」のように名詞に「～する、～になる」をつけたり、あるいは「明るくする、長くする、明るくなる、長くなる」のように形容詞の連用形に「～する、～なる」をつけて動詞として用いるのに感覚的に似たところがあり、あらゆる名詞や形容詞に適用されるとは限らない点でも同様である。

## 2.1 meN-自動詞と meN-他動詞の区別

佐々木（1982）は、men-darat「着陸する」、mem-buruk「どんどん悪くなってゆく」、meng-gunung「山のようになる」の meN-接頭辞は「向かう、向かって変化してゆく、のようになる」のプロセスであり、「出発点から帰着点に向かう」と述べている。meN-接頭辞を使う meN-動詞は、語幹によって、自動詞か他動詞かが決まっている。meN-自動詞と対応している meN-他動詞には「動作主」「被動作主・動作対象」が必要である。インドネシア語には屈折変化がないといわれているが、「人称」による屈折は存在する。その「人称」は、文法カテゴリー「態」にしたがい、「動作主」「被動作主・動作対象」

<sup>1</sup>接頭辞 meN-は環境によって「me-, men-, meny-」の異形態を持つ。ホラス（2006:15）によると、形態変化には次の規則がある。

【1】Nが消え、[me-]の形となる。

【2】語幹の頭音にNがかぶさり、語幹の頭音が鼻音に変わる。

【3】Nが鼻音に変化してそのまま語幹に付く

まとめると、接頭辞 meN-の形態変化は以下の通りである。

①[me-]のまま→ l,r,m,n,ny,w,y から始まる語

②[mem-]に変化するもの→b,p（pは欠落する）で始まる語

③[meN-]に変化するもの→c,d,j,t（tは欠落する）で始まる語

④[meng-]に変化するもの→母音、g,h,k（kは欠落する）で始まる語

⑤[meny-]に変化するもの→s（sは欠落する）で始まる語

本稿では基本的に、接頭辞 meN-と表記する。

<sup>2</sup> 動詞化というよりむしろ他動詞化するという働きがあると崎山理（1982）が指摘している。確かに、meN-接頭辞は語根を他動詞化する働きがあるが、場合によって、自動詞化する働きもあると考えられる。

の対立で、meN-接頭辞、ゼロ接辞、di-接頭辞によって明示されている。

- a. meN-接頭辞：対応する主語が「動作主」
- b. ゼロ接辞：「動作対象」を主語とする文では、「動作主」が1人称・2人称の場合
- c. di-接頭辞：「動作対象」を主語とする文では、「動作主」が3人称の場合

(1) Aku / Kamu / Anto me-mukul Ari.

私 君 アント PREF-殴る アリ

(私/君/アントがアリを殴った。)

(2) Ari aku pukul.

アリ 私 殴る

(アリが私に殴られた。)

(アリは私が殴った。)

(3) Ari kamu pukul.

アリ 君 殴る

(アリが君に殴られた。)

(アリは君が殴った。)

(4) Ari di-pukul (oleh) Anto.

アリ di-殴る によって アント

(アリがアントに殴られた。)

(1)の1人称 Aku (私)、2人称 Kamu (君)は、受動の(2)(3)では動詞の前に来て、さらにゼロ接辞で表示されている。一方、(1)のアントは3人称であるため、受動に変えた(4)では動詞の後に来て、動詞自体に di-接頭辞が付けられている。

このように、ヴォイスの範囲で、di-接頭辞と meN-接頭辞は親密に関わっている。この di-接頭辞はさらに本研究のテーマである ter-接頭辞の ter-構文と関連している。

### 3. 研究の動機

インドネシア人日本語学習者は、di-構文を機械的に日本語の受身「(ら)れる」に置き換えることができるが、ter-構文はそうではない。機械的に日本語の受身に置き換えられない場合、以下で述べるように ter-構文を「ている」、「である」「てしまう」「た」

「(ら)れる」に訳している。なぜ、ter-構文がこのように広く使われているのだろうか。インドネシアの国語文法でも、ter-構文は受動として詳しく扱われていない。本研究では、ter-構文の働きを明確にしたい。

#### 4. 本研究の構成

本研究の構成は以下の通りである。

第1章 インドネシア語のしくみ

第2章 ヴォイスの観点から見た日本語との対照におけるインドネシア語のヴォイスと受動

第3章 インドネシア語と日本語の受動

第4章 「結果状態」から見た ter-構文

第5章 ter-構文と「はたらきかけ」・「結果」の相関

第6章 結論



## 第2章

### ヴォイスの観点から見た

#### 日本語との対照におけるインドネシア語のヴォイスと受動

##### 1. ヴォイスについて

インドネシア語の接辞には接頭辞、接中辞、接尾辞、接頭尾辞がある。接頭辞の代表的なものには、meN-と di-がある。これらを動詞の語基の前につけることによって、meN-動詞と di-動詞ができる。規範文法において、meN-は能動である一方、di-は受動である。例えば、pukul（殴る）という動詞の語基に meN-接頭辞を付けると memukul（殴る：能動）となり、di-接頭辞を付けると dipukul（殴られる：受動）となる。

現代の規範文法『標準インドネシア語文法』（Alwi 1998: 345）では、受動文は基本的に3種類に分類されている。それぞれ、di-接頭辞を付ける受動文（以下 di-構文と略）、ter-接頭辞を付ける受動文（以下、ter-構文と略）、そして ke- -an 接頭尾辞を付ける受動文（以下 ke- -an 構文と略）である。

この能動と受動の対立に、「ヴォイス」という用語を用いることにする。ヴォイスとは、ある行為・出来事の枠で、「行為者が何を行ったか」、「対象が何をされたか」、「対象に何が起こったか」「行為者が何を引き起こしたか」などに関わる言語形式と意味の問題である。ここでは、先行研究として、言語学大辞典、仁田（1981）、柴谷（1982）、Haspelmath（1990）、村木（1991）、佐藤（2005）などを取り上げる。

##### 1.1 言語学大辞典（1996）

言語学大辞典には、ヴォイスがどのように能動、受動と関わっているのか、以下のよう

態は印欧語の動詞の文法範疇の一つであり、英語などでは、能動態（active voice）と、受動態（passive voice）の区別として表されている。これは動詞の表す動作と、その動作を起こす者（動作主）、および、その動作を受ける者（受動者）とのかかわりあいを示すものである。動作を起こす者が主語となる場合は、その動詞は能動態の形を取り、その動作を受ける者が主語となる場合は、その動詞は受動態の形を取る。（p.865）

## 1.2 仁田義雄 (1981)

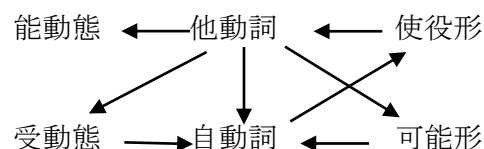
仁田はヴォイスを以下のように述べている。

「態」とは、動詞の形態的な範疇であるとともに、動詞の表す動作や作用の成立に関与する関与者のどれを中心にして、その動作や作用の実現を把握・表現するか、といったことにかかわるものである。動作や作用には、その実現に必要な関与者が決まっている。それが「格」である。態とはそういった動作や作用の語彙的意味によって決まってくる関与者間の相互関係の図式を、何を中心として把握・表現するか、それがいかなるありかたを取る実現であるかといった、動作図式、作用図式の把握の仕方にかかわるものである。したがって、態は、格と、格を表示する格助詞にかかわる現象である。一般に、日本語の態としては、能動、受動、使役、可能、自発などの態が挙げられる。能動や受動や使役の態と可能や自発の態とは、基本的な性質を異にしている。敬譲や希望は態ではない。敬譲は待遇性の問題であり、希望は表現意図の問題である。狭義では、態は能動・受動・使役に限定する方がよいであろう。更に、態の体系の基本は、能動態と受動態の対立である (p.110)。

## 1.3 柴谷方良 (1982)

柴谷 (1982 : 5) は、ヴォイスの考察の範囲について、次のように述べている。

ヴォイスとは、同内容のことを違った声 (形) で表すことである、という原義的かつ狭義の解釈に従えば、他動詞の能動形と受動形が考察対象となるが、実際には、自他の対応、使役形、及び可能形などが考察範囲に含まれるのが普通である。これらの諸形態は図に示すように関連していて、一つを他から切り離して論じることは不可能だからである。



#### 1.4 Martin Haspelmath (1990) (笠間 (2009) を参考)

Haspelmath (1990 : 54) では、受動の形式が実現する意味は受身に限られていないとされている。様々な源から语法化が起こり、最終的にそれが受動に集約していく。源の4つのものが、右方向に行くにしたがって、源の持っている特性がそれぞれ弱められて、右端の受動の意味機能に収束していく。

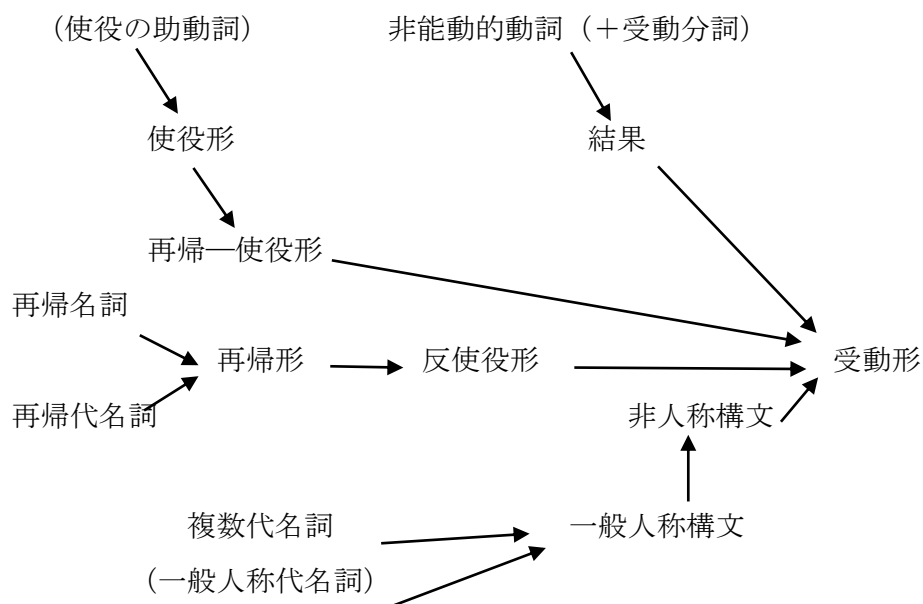


図 1 : 受動形態素の諸来源ならびにその収束 (p.54)

#### 1.5 村木新次郎 (1991)

ヴォイスが言語学分野とどのように関連するかに関して、村木 (1991:1) は以下のよう述べている。

文の関与者のうちどのメンバーを中心にのべるかという文の意味構造が主役で、動詞の形態は文の意味構造を反映したものであると考えることができる。つまり、ヴォイスというのは、何に視点をおいて表現するかという文の機能意味構造にもとづく統語論的な側面と、述語になる動詞がどのような形態をとるかという動詞の形態論的な側面の相互関係の体系であるといえる。

また村木は、以下の構文を、ヴォイス性を持っているため、ヴォイスのサブカテゴリーとして扱っている。

「受動文」「使役文」「自動詞文と他動詞文」「相互文」「再帰文」「可能文」「希望文」「自発文」「授受文」「てある文」。

## 1.6 佐藤琢三 (2005)

佐藤はプロトタイプ論の観点からヴォイスの定義を行っている。このヴォイスの概念規定とプロトタイプを更に次のように示している。

概念規定：主語を中心とした事態の関与者と述語の表す動きとの意味的關係を示すカテゴリー

- (a) 形態：2つの文に格の交替を伴う述語の形態的対立が認められる。
- (b) 統語：2つの文の主格の名詞句が義務的に異なる。
- (c) 意味：2つの文がともに動きを表す。

本論文では、以上のように定義されるヴォイスのうち、特に受動態を取り上げる。

## 2. 受動の定義について

人間の言語の大きな特徴の一つは、同じ事態・出来事を異なる形式で記述することができるということである。多くの言語では、その典型的なものとして能動と受動の対立がある。これらの二つの形式はヴォイスという文法用語に含まれる。能動と受動は、動詞の表す動作と、その動作を起こす者（動作主、agent）、及び、その動作を受ける者（被動者、patient）との関わり合いを示すものである。

まず受動は、様々な定義が多くの言語学者によって提案されている。ここでは寺村（1982）による受動の定義を再掲する。

受動というのは、要するに、動作、作用の主体が、他の何ものかに働きかける場合に、動作主、つまり動きの発するところを主役とするのではなく、動きを受けるもの、動きの向かう先を主役として事態を描く表現であるが、それが文法的に受動態と認定されるためには、（それぞれの言語で）一定の形態的、統語的、意味的特徴を具えていなければならない。（p.212）

この寺村の定義に従えば、それぞれの言語で、形態的特徴から意味的特徴まで明確にする必要がある。

次は、類型論からみた受動の定義を述べていく。

## 2.1 類型論からみた受動の定義

まず、Perlmutter and Postal (1977) は “Two Universals of Passivization” という節で、「主語」と「(直接) 目的語」「(間接) 目的語」の関係から普遍的な受動が成り立つとしている (p.399)。その普遍的な受動について、以下のように述べている。

1. A direct object of an active clause is the (superficial) subject of the ‘corresponding’ passive.
2. The subject of an active clause is neither the (superficial) subject nor the (superficial) direct object of the ‘corresponding’ passive. (p.399)

Perlmutter and Postal が指摘した「主語」「(直接・間接) 目的語」の普遍的な受動は多くの言語学者に認められている。その中で、Haspelmath (1990) は、最も典型的な受動は次のような構造であるとしている。

1. The active subject corresponds either to a non-obligatory oblique phrase or to nothing; and
2. The active direct object (if any) corresponds to the subject of the passive; and
3. The construction is somehow restricted vis-à-vis another unrestricted construction (the active), e.g. less frequent, functionally specialized, not fully productive.

ここでは、能動の元の主語、元の目的語が受動化するとどのように変わるかをみている。「受動的な形態のない受動構文は存在しない」、つまり受動構文における受動の形態は最も重要な部分であると Haspelmath (1990 : 27) は主張している。

また、サンプルの 80 言語中、わずか 31 言語だけが受動を用いているとし、その中に、少なくとも 6 形式があることを指摘している。最も一般的なタイプは「語幹に接辞を付ける」<sup>3</sup>というタイプである。

---

<sup>3</sup> “stem affix”のことである。この中に “inflectional affixes” (アスペクト、テンス、人称マーカ) も含む。

(1)

Expression types	Number of languages
Additional stem affix	25
Auxiliary verb (+participle)	6
Extrainflectional affix	3
Differential subject person markers	2
Alternate stem affix	1
Particle	1

表 1：受動形態のタイプ (Haspelmath 1990)

さらに、Dixon and Aikhenvald (2000) は、「主語」「目的語」、つまり「項」の観点から考察して、項の増減 valency increase と valency reduction から受動をみている。

Valency increase : (1) causative; (2) applicative

Valency reduction : (1) passive and anticausative; (2) antipassive; (3) reflexive and reciprocal; (4) middle

また、Dixon and Aikhenvald (2000) は、以下の条件を満たせば典型的な受動であると述べている。

(a) Passive applies to an underlying transitive clause and forms a derived intransitive.

(b) The underlying O becomes S of the passive.

(c) The underlying A argument goes into a peripheral function, being marked by a non-core case, adposition, etc.; this argument can be omitted, although there is always the option of including it.

(d) There is some explicit formal marking of a passive construction—generally, by a verbal affix or by a periphrastic verbal construction (or by using a different kind of pronominal suffix)

## 2.2 類型論からみた受動の一般化

Keenan and Dryer (2007) は、*John was slapped* を、次の点を満たしているため基本的

な受動 (Basic Passive) であると言っている：それは(i)動作主がある、(ii)他動詞に由来している、(iii)主語は動作主、目的語は非動作主、動詞は動作を表す、の3つである。そして、通言語的に有効であるとする、下記の受動に関する一般化 (Generalization、Keenan and Dryer はこれを'G'と示している) を提案している。以下の日本語訳は風間 (2009) による。

G-1：ある言語には受動が全く欠けていることがある。

G-2：もしある言語が何らかの受動を持っている場合、それは上記の基本的な受動 (Basic Passive) であって、さらにそれのみを持っている可能性がある。

G-2.1：もしある言語が動作主を示す句を伴った受動を持っていれば、伴わない受動も持つ。

G-2.2：もしある言語が状態動詞の受動を持っていれば、出来事を示す受動を持つ。

G-2.3：もしある言語が自動詞からの受動を持っていれば、他動詞からの受動も持つ。

G-3：基本的な受動を有する言語はふつう形態的に異なる2つ以上の受動を持つ。

G-4：もしある言語が何らかの受動を有していれば、それは完了アスペクトの意味範囲をカバーするのに用いられ得る。

G-5：もしある言語が2つもしくはそれ以上の受動を有するならば、それはカバーするアスペクトの範囲に関して意味的に異なっている。

G-6：受動の動詞句の主語は、それが他動詞の目的語として表現される場合、動作の影響を受けるものとして理解される。

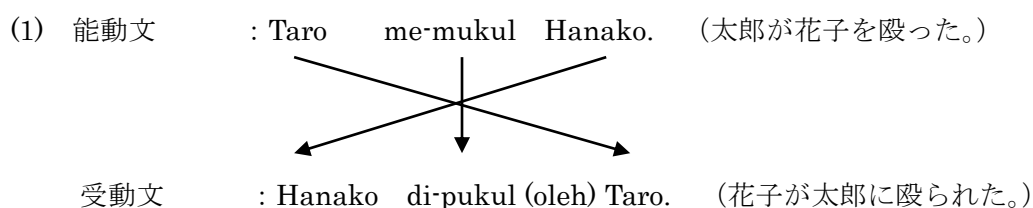
G-7：ある言語における異なったいくつかの受動は、主語の被る影響 (affectedness) の度合いに応じて異なっている。それが肯定的な影響であろうと否定的な影響であろうと、その変異の広がりにはアスペクトによる広がりよりは狭い。

### 第3章 インドネシア語と日本語の受動

受動態の機能としては、日本語とインドネシア語はほぼ同じであるが、統語的・意味的特徴については相違点もあるのではないだろうか。日本語の受動態の形態については、「他動詞能動文の主語である名詞を格下げして、それに「に」とか「によって」とかをつける。目的語の名詞を主語に格上げして、文頭に置く。文末の他動詞にはいわゆる受身の助動詞「られる」をつける」と奥津（1996）が説明している。

インドネシア語の能動態を受動化する場合にも、典型的なものでは目的語を主語にし、主語を格下げするところは同等だが、独自の部分としては、他動詞能動文「meN-接頭辞」を受動文「di-接頭辞」に変えるところがある。また、“oleh”（日本語の「に」に当たる）という動作主マーカーを任意に述語と目的語の間に置くこともある。

変換は次のように行われる。



インドネシア語の接辞には接頭辞、接中辞、接尾辞、接頭尾辞がある。接頭辞の代表的なものには、meN-と di-がある。これらを動詞の語基の前につけることによって、meN-動詞と di-動詞ができる。規範文法において、meN-は能動である一方、di-は受動である。例えば、pukul（殴る）という動詞の語基に meN-接頭辞を付けると memukul（殴る：能動）となり、di-接頭辞を付けると dipukul（殴られる：受動）となる。

現代の規範文法『標準インドネシア語文法』（Alwi 1998: 345）では、受動文は基本的に3種類に分類されている。それぞれ、di-接頭辞を付ける受動文（以下 di-構文と略）、ter-接頭辞を付ける受動文（以下、ter-構文と略）、そして ke- -an 接頭尾辞を付ける受動文である。

次の節では、インドネシア語の受動構文と比較するために、日本語の受動文について概観する。



## 1. 日本語の受動

本研究では、まず益岡（1982）に基づいて日本語の受動の意味に対する区別を取り上げる。益岡（1982）は、伝統的文法研究と生成文法研究によって考察を行っている。伝統的文法研究（松下（1928））と生成文法研究（井上（1976）・Kuroda（1979））では、受動を次のように区別しているという。

(2)

	松下	Kuroda・井上	益岡
区別	利害の被動	に受身	昇格
	単純の被動	によって受身	降格

表 2

### 1.1 松下大三郎（1928）（1930）

松下（1930）は受動を「利害の意味の有無」に基づいて区別している。利害の意味が有るものを「利害の被動」と名付け、「XガYニ...ラレル」で表され、「或るものの動作に由って利害を被る意を表す被動」（p.157）であり、主語は「人格」を有するものに限られるとする。他方、利害の意味がないものを「単純の被動」と名付け、「Xガ（Yニヨッテ）.....ラレル」で表され、主語は非人格でもかまわないとする。

一方、松下（1928年）では受動を「人格的被動」と呼んでいた。

「被動」とは他からある動作をされるのである…「人格的被動」は被動の主体を一人格（意志格）として取り扱った被動である。被動は他から被る動作であるから被動の主体が一人格である以上必ず利害を受けなければならない。利害を受けるということが即ち人格として取り扱うことなのである…被動の主体は皆人格が有る。利害を感じるという意味に於いて人格が認められて居る。利害と云っても多くは害である。中には雑有迷惑なものもある。人格的被動は必ず利害の意が有るから利害的被動と云っても善い。…日本語では無生物は特に人格を附與して考へない限りは被動の主にしなない。（pp.352-354）

つまり、松下の「人格的被動」は、動作の影響を受ける主体が利害を感じることできる人格を持ったものでなければならないということである。そして、動作の影響の受

け方によって「自己被動」「所有物被動」「所有物自己被動」「他物被動」の四種に分類されている。「自己被動」は自己が動作を受けることである(3)。「所有物被動」は他物の動作を自己の所有物へ受けることである(4)。「所有物自己被動」は所有物の動作を自己利害として受けることである(5)。「他物被動」は他物の自己に関係ない動作を間接の被害と見ることである(6)。「他物被動」は自動詞の受身文や間接受身文であるとしている。さらに受身文を作る動詞が自動詞か他動詞かは問題ではなく、動作の主体と客体がどのように関係しているかが受身文の意味に深く関係していると述べている。

- (3) a. 人、盗賊に殺される  
b. 小児、蜂に刺さる。
- (4) a. 人、盗賊に物をぬすまる。  
b. 小児、蜂に顔を刺さる。
- (5) a. 父、子に死なる。  
b. 妻、夫に遊ばる。
- (6) a. 雨に降らる。  
b. 他人に成功をせらる。

## 1.2 井上和子 (1976)、黒田成幸 (1979)

次に、生成文法研究の観点から考察した井上 (1976) と黒田 (1979) は、受動をほぼ同じように区別している。井上は、受動の意味と助詞の選択 (「に」と「によって」) の間に相関関係があると以下のように述べている。

「に」には受動文の主語に対する「動作主の働きかけ」の意味がある。「によって」との違いは、この意味で主語と動作主とが密接に関連している場合でなければ「に」が使えないことである。そこで受動文の主語がその働きかけを感じないもの、あるいはその働きかけによる直接の影響を受けないものである場合には、「に」を使うことができない。したがって、主語が無生物の場合に「に」を排することが多い。(p.84)

さらに、井上が考えた「に」と「によって」の受動を基にして、黒田はこれを「に受身文」(*ni passive*) と「によって受身文」(*ni yotte passive*) と名付け、はっきり区別している。「に受身文」は松下の「利害の被動」と同様に、利害(黒田の用語では、受影的(*affective*))

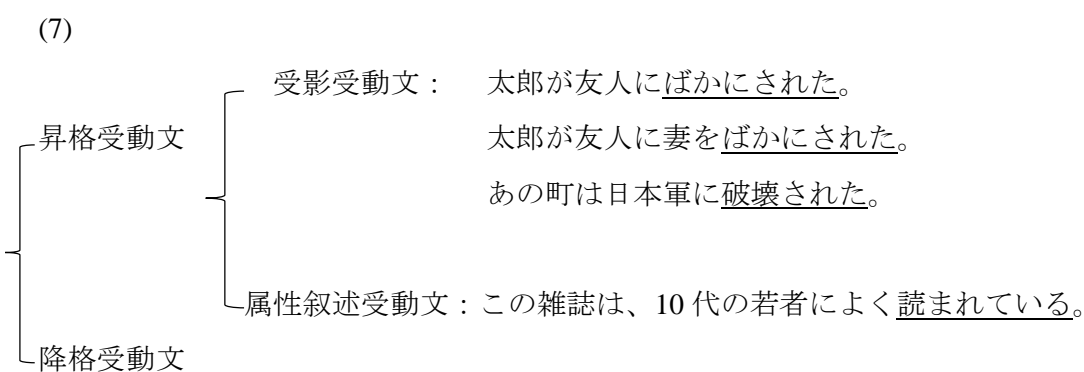
の意味があり、一方、「によって受身文」は松下の「単純被動」と同様に、被害という意味がない。さらに、この種の受動文は対応する能動文と同義的であるとする。

### 1.3 益岡隆志 (1982) (1987)

次は、益岡の区別した、受動態に至る前の過程を取り上げる。まず、日本語の受動態の形態を持つ受動化では、対応する能動文の主語の非主語化と非主語の主語化という過程がある。益岡は前者を「降格」、後者を「昇格」と名付け、以下のように述べている。

昇格が主たる動機である場合には、二重主語が許容されないという一般的制約のために、付随的に主語の降格が起こるのである。このような受動文を「昇格受動文」(promotional passive) と呼ぶことにする。一方、降格が主たる動機である場合には、一般に無主語構造が許されないので、付随的に非主語の昇格が起こる。このような受動文を「降格受動文」(demotional passive) と呼ぶことにする。(1982、p.51)

益岡は、統語的側面から分類した「昇格受動文」と「降格受動文」を、1987年の論文でさらに意味的側面から「受影受動文」と「属性叙述受動文」に分けた。



益岡が述べている「昇格」と「降格」という概念は、Perlmutter&Postal (1974) も受動化による普遍的な影響であると述べている。彼らによれば、直接の目的語の昇格(元の主語の降格も含める)は、目的語の前景化であり、目的語が前景化されたため、構文内の他の要素よりも優位な位置に立つと考えられる。これに対して Tomlin (1980) は、受動構文の成立に最も重要な条件の一つは、主語(ここでは、被動作主、動作・作用を

受ける対象)が動作主よりも thematic であることだとする。

受動構文の主語に関しては、すでに多くの学者によって研究されており、そのうち Langacker (1976) と Schachter (1977) が以下のように提案している。Schachter は「受動構文の主語の指示対象は、話し手にとって中心的役割をもつ。動作主を負かし、その代わりに被動者を際立たせるのが受動構文の最も重要な機能である」と述べている。さらに、Langacker の「受動構文の主語には動詞に描かれた事態の影響でそれ自体がなにも変わらない場合、受動の意味は適切ではない」という説が、現在のところ、多くの学者に認められている。

以上のように、受動構文の主語は大変重要な要素だと考えてもよいであろう。しかし、動作主は受動構文ではあまり必要がない要素かと言えば、そうではない。確かに、動作主は、構文の表層構造には多くの場合表現されていないが、「何らかの形で」含意されている。Givon (1979) によると、英語の受動構文は、その 8 割が「動作主の消失」を伴っている。しかし、そのまま消えるのではなく、その動作主の存在は探知できる。

このように、受動構文内では動作・作用を受ける元の能動文の目的語(対象)が動作主よりも目立つが、動詞に描かれた動作・作用を与える動作主も受動から完全に切り離された要素ではないことがわかる。

#### 1.4 工藤真由美 (1990)

益岡 (1982 年) は受動を統語的側面から格の移動によって分類した。その後、能動文と対応関係の観点から、工藤 (1990 : 51-52) は受動を 2 つのタイプに分類している。

(8)

##### A. 「当事者受動文」

###### A.1 「直接受動文」

###### A.1.1 「直接対象受動文」

①花子が(太郎に)殺される — 太郎が花子を殺す

②ロープが切られる — 太郎がロープを切る

###### A.1.2 「相手受動文」

①花子が(太郎に)かみつかれる — 太郎が花子にかみつく

②花子が(太郎に)手紙を渡される — 太郎が花子に手紙を渡す

③花子が(太郎に)罰金をとられる — 太郎が花子から罰金をとる

## A.2 「間接受動文（持ち主受動文）」

### A.2.1

- ①花子が（太郎に）子供を殺される—太郎が花子の子供を殺す
- ②武蔵が（敵戦闘機群に）舵機を壊される—敵戦闘機群が武蔵の舵機を壊す

### A.2.2

- ①花子が（太郎に）顔に墨をつけられる—太郎が花子の顔に墨をつける
- ②花子が（太郎に）頭から水をかけられる—太郎が花子の頭から水をかける

## B. 「関係者受動文（不利益受動文）」

- ① 花子は太郎に死なれる—\*太郎が花子を死ぬ（太郎が死ぬ）
- ② 花子は太郎に酒を飲まれる—\*太郎が花子に酒を飲む（太郎が酒を飲む）

この A タイプの受動文と B タイプの受動文の共通点と相違点は以下のようである。

共通点：

1. 構文からみると、対立する能動文における主語＝働きかけ手、あるいは対応関係が認められるもとの文における主語＝主体は主語の位置からはずれている。
2. 意味からみると、受動文の主語の位置にくる参加者は「受け手」である。

相違点：

1. 構文からみると、B タイプの受動文は常に参加者を一項増加させる点で、参加者の変更がない A.1 タイプの受動文と異なっている。従って、自動詞からも成立しうる。
2. 意味からみると、B タイプの受動文は出来事成立によって「不利益」を「間接的に」受けることを表す。従って、主語は「人」に限られている。一方、A.1 タイプの受動文は、行為＝はたらきかけを「直接的」に受け、不利益性について「中立」である。

次に、インドネシア語の受動表現について概観するとともに、インドネシア語の受動表現と日本語の受動表現を比較して考察した先行研究について考察する。

## 2. インドネシア語の受動

### 2.1 di-受動

インドネシア語の他動詞文は、主語が動作主の場合、述語内の動詞は接頭辞 *meN-* を用いた形をとる。主語が被動作主の場合、動作主が 1 人称・2 人称であれば接頭辞を伴

わない（ゼロ接辞）他動詞が人称詞の直後に続いて文を構成する<sup>4</sup>。動作主が3人称であれば di-を付けた他動詞を用いる（第1章例文(1)～(4)を参照）。

Sutedi (2006) は、「meng-動詞」構文と「di-動詞」構文の異なるレベルの比較を通じて、「di-動詞」構文の性質について、以下のように示している。

(a) 情報構造：「meng-動詞」は新情報、「di-動詞」は旧情報

(9) Ali mem-beli buku. Buku itu di-beri-kan pada adiknya Nani, kemudian  
アリ meN-買う 本 本 その di-あげる-kan に 彼の妹 ナニ そして  
di-baca-nya setiap hari.  
di-読む-nya 毎日

(直訳：アリが本を買った。その本は妹のナニにあげられて、そして、毎日彼女に読まれた。)

→アリが本を買って、妹のナニにあげた。ナニが毎日それを読んでいる。

(b) 談話—プラグマティック・レベル：「meng-動詞」は subject focus、「di-動詞」は action focus 又は object focus

(10) Ali mem-baca buku di ruang depan. (subject/ agent focus)  
アリ meN-読む 本 で 応接間  
(アリが応接間で本を読んだ。)

(11) Buku itu di-baca (oleh) Ali di ruang depan. (patient/ object focus)  
本 その di-読む (によって) アリで 応接間  
(その本をアリが応接間で読んだ。)

(12) Di-baca(-nya) buku itu di ruang depan. (action focus)  
di-読む-nya 本 その で 応接間  
(その本を (彼が) 読んだのは、応接間だ。)

この構文には単一の動作主があり、それによって連続した規則的な動作が時系列順に配列されている。このような出来事・事態を表現するために、di-接頭辞がつく構文がよく使われる。Purwo (1989) はこのような di-構文に注目して、他の構文と対照しながらこの

<sup>4</sup> この種類の受動は bare passive と呼ばれるが、本論文では対象としない。

di-構文の性質（特に、動詞のニュアンス、つまり統語的な性質より語用論的な性質）を考察した。結果は以下の通りである。

- ①動詞には強調がない。
- ②発話の内容に注目する
- ③再び言及
- ④同時間的（な連続の動作）
- ⑤談話の流れを進める（前景化の理由で）
- ⑥点相動作
- ⑦既然法
- ⑧目立たせるため（被動者が動詞の左にある場合）
- ⑨隠すため（被動者が動詞の右にある場合）
- ⑩対照するため（被動者が動詞の前に置かれると互いに対照されている）
- ⑪箇所と箇所間に長い文章をはさむ（ギャップ）場合
- ⑫oblique 名詞句の昇格
- ⑬主題化

また、受身としての di-構文を日本語の受身と比較するため、Sutedi (2006) は直接受身と間接受身に分けて、以下のように述べている。

(13) 直接受身との対照

	インドネシア語の「di-動詞」の例 「A di-V (oleh) P」	日本語の「(ら)れる」の例 「A が P に V-られる」	対照 型
13	a. Taro <i>membunuh</i> Jiro. (能動) b. Jiro <i>dibunuh</i> (oleh) Taro. (受動)	a. 太郎が次郎を殺した。(能動文) b. 次郎が太郎に殺された。(受動文)	一致
14	a. Guru <i>memuji</i> Hanako. b. Hanako <i>dipuji</i> (oleh) guru.	a. 先生が花子をほめた。 b. 花子は先生にほめられた。	一致
15	a. Kaula muda <i>mencintai</i> lagu ini. b. Lagu ini <i>dicintai</i> oleh kaula muda.	a. 若者がこの歌を愛している。 b. この歌は若者に愛されている。	一致
16	a. Ali sedang <i>membaca</i> novel itu b. Novel itu sedang <i>dibaca</i> (oleh) Ali.	a. アリがその小説を <u>読んで</u> いる。 b. *その小説はアリに <u>読まれて</u> いる。	欠如
17	Novel ini sering <i>dibaca</i> oleh Bill Clinton	その小説はクリントン大統領に何度も <u>読まれた</u> (ものである)。	一致

表 3 : 「di-動詞」と「られる」との対照 (1)

以上の例から、無情物を受動文の主語にする場合、di-構文は特徴づけが必要ない一方、「られる」は特徴づけが必要であることがわかる。

(14)間接受身との対照

①他動詞からの間接受身

a. 所有受身（身体受身）との対照

	インドネシア語の「di-動詞」の例 「A di-V (oleh) P」	日本語の「(ら)れる」の例 「A が P に O を V-られる」	対照型
18	a. Laki-laki itu <i>mencuri</i> tas saya. (能動文) b. Tas saya <i>dicuri</i> (oleh) laki-laki itu.	a. あの男が私の鞆を盗んだ。 b. ?私の鞆はあの男に盗まれた。 c. 私はあの男に鞆を盗まれた。	分裂 (文型)
19	a. Kaki saya <i>diinjak</i> orang sebelah. b. Kaki saya <i>terinjak</i> (orang).	a. ?私の足が隣の人に踏まれた。 b. 私は隣の人に足を踏まれた。	融合 (意味)
20	Buku harian saya dibaca oleh ibu.	a. ?私の日記は母に読まれた。 b. 私は母に日記を読まれた。 c. 母が私の日記を読んで、私は嬉しい。	新規 (恩恵の 意味)

表 4 : 「di-動詞」と「られる」との対照 (2)

この受動文では、被動作主 (P) を「所有者」(主語) と「所有物」(目的語) に区別する必要がある。ここでいう主語 (S) は、di-構文では「所有者」と「所有物」の両方を指すのに対して、日本語の「られる」では「所有者」を指し、「所有物」は「所有者」から切り離して、別の目的語として考える。この受身では、項が増えるため、構造的に「分裂」だと Dedi Sutedi は述べている。

また、di-構文では、場面や動詞自体の意味によって被害・恩恵という意味が表面に現れる。一方、日本語の「られる」は迷惑の意味しかないので、構造的に「新規」と考える。

最後に、構造的に「融合」といえるのは、di-構文では意志的動作か無意志的動作かの区別があるが、「られる」にはないため「融合」とであると述べている。



b. 所有受身以外のものとの対照

	インドネシア語の「di-動詞」の例 「A di-V-kan (oleh) P」	日本語の「(ら)れる」の例 「A が P に O を V-られる」	対照 型
21	Saya <i>dimainkan</i> piano oleh adik sampai larut malam. (恩恵)	a. 私は夜遅くまで妹にピアノを弾かれた。(迷惑) b. 私は夜遅くまで妹にピアノを弾いてもらった。(恩恵)	欠如 新規
22	Saya <i>diajarkan</i> Bahasa Jepang oleh Pak Yamamoto. (恩恵)	a. 私は山本先生に日本語を教えられた。(中立・迷惑) b. 私は山本先生に日本語を <u>教えていただいた</u> 。(恩恵)	欠如 新規
23	Ali <i>dibacakan</i> huruf kanji oleh Taro. (恩恵)	a. アリは太郎に漢字を <u>読まれた</u> 。(中立・迷惑) b. アリが太郎に漢字を <u>読んでもらった</u> 。(恩恵)	欠如 新規

表5：「di-動詞」と「られる」との対照 (3)

この受動文では、di-構文に接尾辞-kan を付けるため、「恩恵」を表すが、日本語の「られる」には「恩恵」の意味がないため、構造的に「欠如」だと述べている。

また、di-構文で表す「恩恵」の意味が日本語の構文では「られる」ではなく、「～てもらおう」に対応するため、構造的に「新規」として扱う。

②自動詞からの間接受身

	インドネシア語の「di-動詞」の例 「A ditinggal Vx-O (oleh) P」	日本語の「(ら)れる」の例 「A が P に Vx-られる」	対照 型
24	Saya <i>ditinggal mati</i> oleh ayah dua tahun yang lalu.	私は2年前、父に <u>死なれた</u> 。	融合
25	Ali <i>ditinggal pergi</i> oleh istrinya dua bulan yang lalu.	アリは、2ヶ月前から、奥さんに出かけられた。 <sup>5</sup>	融合
26	Saat sibuk, ayah malah <i>ditinggal libur</i> oleh bawahannya.	忙しいとき、父は部下に <u>休まれた</u> 。	融合

表6：「di-動詞」と「られる」との対照 (4)

<sup>5</sup> 先行研究に「アリは、2ヶ月前から、奥さんに出かけられた」と書いてあるが実際にはあまり使われていない。正しくは「出て行かれた」か「家出された」。

このタイプの受動文では、動作主が普段ある場所に存在しないようになる。そのため、「被動作主と同じ場所に存在しない状態」を表す。よく使われる動詞が「行く・出かける・帰る・逃げる・休む・死ぬ」などである。日本語の場合は、動詞がそのまま使えるが、インドネシア語の場合は、「ditinggal Vx」（残されて Vx）という文になる。そのため、このような構文は構造的に「融合」と考えられる。「残される」という、意味的に迷惑・いやな気持ちが表現できるため、日本語の受身「られる」と似ている。

この章で用いた「昇格」と「降格」という概念は、普遍的な受動化の反映であるということを示した。直接目的語の昇格（元の主語の降格も含める）は、目的語の前景化であり、受動態の一種として認められている。目的語が前景化されたため、構文内の他の要素よりも優位な位置に立つと考えられる。受動構文で最も重要な条件の一つは、主語（ここでは被動作主、動作・作用を受ける対象）が動作主よりも thematic であるということである。これは ter-構文・di-構文にも共通している。

## 2.2 田中真理 (1991)

田中は「インドネシア語を母語とする学習者の作文に現れる「受身」についての考察」という研究テーマで、インドネシア語の受動構文は、di-構文が日本語の「自動詞表現」及び「自発表現」と対応し、ter-構文が日本語の「変化の結果の状態」及び「可能表現」に対応するとしている。

まず、di-構文について、取り上げられている例文を挙げておく。

(15) Pintu masuk di-tutup pada jam 10 malam.

ドア 入る di-閉める に 時間 夜

(入り口は夜10時に閉められた。)

=入り口は夜の10時に閉まる。

(自動詞表現)

この例文は田中の【規則4】(3)<sup>6</sup>に一致し、いわば「Xガ(Yニ)Vサレル」という文型である。Xが行為を受ける対象で、YはVの行為者を示している。また、この文型

<sup>6</sup> 田中(1991)は「日本語の受身文(直接受身)をdi-構文に置き換えることはできるが、その逆は成立しない」とし、1) 行為を受ける対象、行為をするものが有情物か非情物か、2) 行為を受ける対象か行為をするもののどちらかが第一人称か、または行為を受ける対象が第一人称の所有格を伴うか、3) いわゆる「持ち主の受身」か、という3つの基準から「di-構文を自然な日本語に移すときの規則」を提案している。そのうちの規則の一つはRapat akan dibuka(会議が開かれます)、つまり「Yが示されていない場合の規則」で、そのまま日本語の受身が使える。

は、上の例文で見たように、X が非情物で Y が（表面に現れなくても）有情物の場合、「自動詞表現」であるとする。次の例文も同様である。

(16) Roti yang baru di-bakar.

パン 関係代名詞 したばかり di-焼く

(焼けたばかりのパン。)

その他の di-構文では「自発表現」として次のような例文が取り上げられている。

(17) Semuanya di-rasa-kan seolah-olah baru terjadi kemarin.

全て di-感じる-kan まるで したばかり 起こる 昨日

(すべてまるで昨日のことに感じられる。)

そして、ter-構文は以下のように、それぞれ日本語の「変化の結果の状態」((18)(19))及び「可能表現」((20))で表せる。

(18) Di situ ter-tulis bermacam-macam huruf kanji seperti Ko dan Otsu.

に そこ ter-書く いろいろ 文字 漢字~のような甲 と 乙

(そこには、甲とか乙とか、いろいろな漢字が書いてあった。)

(19) Kalimat itu ter-cantum pada halaman 12, baris13.

文 それ ter-載る に ページ 行目

(その文は 12 ページ 13 行目に載っている。)

(20) Obat itu tidak ter-minum oleh-nya, karena begitu pahit rasanya.

薬 それ ~しない ter-飲む によって-彼 ~のだから とても 苦い味-薬

(その薬はとても苦いので、彼には飲めない。)

インドネシア語の受動構文及び対応する日本語構文について、田中は以上のように述べているが、これ以上の説明はしていない。

### 2.3 湯浅彰子 (2003)

湯浅 (2003) は、インドネシア語の三種の受動表現を、「意図性」(Volitionality)及び「責任性」(Responsibility)という観点から以下のように述べている。

A) di-接頭辞を付ける受動構文

この構文は日本語の「直接受身」と対応させることができる。このような受動構文には対応する能動文があり、能動文で二項述語であった動詞は受動化しても変わらない。

(21) Sachiko di-pukul (oleh) Jiro.

幸子 di-殴る に 次郎

(幸子が次郎に殴られた。)

(22) Pada tahun 1511 Malaka di-serbu (oleh) bangsa Portugis.

に 年 マラッカ di-攻撃する に 民族 ポルトガル

(1511年にマラッカはポルトガル民族に攻撃された。)

(21)(22)の受動構文は以下の能動文でも同様に二項動詞で表される。

(23) Jiro me-mukul Sachiko.

次郎 me-殴る 幸子

(次郎が幸子を殴った。)

(24) Pada tahun 1511 bangsa Portugis me-nyerbu Malaka.

に 年 民族 ポルトガル me-攻撃する マラッカ

(1511年にポルトガル民族がマラッカを攻撃した。)

この構文を見ても分かるように、動作主の行為には意図性がある。受動の主語は動詞に描かれているその意図的な動作から、直接的な影響や働きを被っている。つまり volitionality の強い受動構文である。従って、事象の生起に関する責任も動作主にある。このように、「意図性」及び「責任性」が被動者にはなく、動作主側にあるため、文中には現れていなくても、その存在を感じることができる。

また di-構文は、動作主の意図によって事象が生起するかもしれないということが決まってくるため、湯浅はこれをスル型であるとしている。事象を動作主側から見ているのか（能動態）、それとも被動作主側から見ているのか（受動態）の違いにより能動／受動の違いはあるものの、基本的に表されている事象は同様であって、いわゆる「態」であると言える。湯浅（2006）は述べている。この「態」の立場について、湯浅は、柴谷

(1982) の述べている「第三者の受身 (迷惑受身)」等を含む様々な受動表現全体を広い意味での'Passive Voice'、つまり一般的に定義されている「態」としている。

#### B) ter-接頭辞を付ける受動構文

湯浅は ter-構文について、まず、松岡(1990)を引用して、「ter-他動詞文は受身または自発態である」と述べている。また、Gorys (1980) や Sitinduan (1984) の ter-接頭辞の多機能の研究を受け継ぎ、以下の(25)「受動完了」、(26)「自発」、(27)「可能」<sup>7</sup>、(28)「無作為」を認めている。

- (25) Bahasa Melayu dipakai sebagai bahasa pengantar sehingga tersebar luas.  
語 ムラユ di-使う として 語 仲介 その結果 ter-広める 広く  
(ムラユ語が仲介語として使用された結果、広く広まった。)
- (26) Kenji ter-pesona pada kecantikan wanita itu.  
健二 ter-魅了する に 美しさ 女性 それ  
(健二はその女性の美しさに魅せられた。)
- (27) Bunyi itu ter-dengar sampai di sini.  
音 それ ter-聞く まで で ここ  
(その音がここまで聞こえる。)
- (28) Kaki anak itu ter-injak oleh saya.  
足 子供 それ ter-踏む に 私  
(その子供の足は私によってうっかり踏まれてしまった。)  
(意訳：その子供の足を私はうっかり踏んでしまった。)

(25)から(28)までは非意図的のように見える。さらに、これをパラフレーズすると「ひとりでに」のような副詞によって非意図性がより明らかになる。このように、動作主の意図性がないのに (あるいは弱いのに)、ある事象は起り得る。この事象は誰にも起り得る可能性が内在しているため、「責任性」は被動者にある。

(25)は受動が完了した状態を示す。ムラユ語が故意に広められたのではなく、コミュニケーション語として使われた結果、自然に広まったことを示している。(26)は女性が健二を故意に魅了しようとしたわけではないのに、健二がひとりでに魅せられたことを

<sup>7</sup> 湯浅 (2006) では、この「可能」を「受動的可能、自発的可能」として扱っている。また (28) の「無作為」を「非意図的受動」としている。

示している。(27)は意図的に聞こうとしなくても、聞こえることを示し、(28)は踏もうと思って踏んだのではなく、そこに出ていた足に引っかかって踏んでしまったことを示している。

ter-構文は di-構文と違って、ある事象に動作主の意図がない（あるいは極めて弱い）のに生起することができるため、ナル型として読み取ることができる。つまり、ter-構文は「故意にそうしようとしたわけではないのに、そうなった」という意味を表していると湯浅は述べている。

また、この構文は日本語の自発的受身と対応しているとも述べられている。

### C) ke- -an 接頭尾辞を付ける受動構文

このタイプの受動構文は日本語の「第三者の受身（迷惑受身）」に類似している。統語的側面からみると、対応する構文に含まれない要素が受動構文では主語になる。つまり、構成要素の増加があると言える。

(29) a. Taro <u>ke-hujan-an</u> .	←	Hujan.
太郎 ke-雨が降る-an		雨が降る
(太郎は <u>雨に降られた</u> 。)		(雨が降った。)

(30) b. Dia <u>ke-datang-an</u> tamu.	←	Tamu datang.
彼 ke-来る-an 客		客 来る
(彼は客に <u>来られた</u> 。)		(客が来た。)

また、意味構造から見ると、外界で独立した事象が起こり、それによって別個に存在している主体が心理的・物理的な影響を受ける。この点についても、日本語の「第三者の受身」と共通している。(29)(30)の両方とも自動詞からできており、この点も日本語と共通である。ke- -an 構文も「第三者の受身」も下に示すように、二重構造から構成されている。

- ① 主体の外界での動きや状態（第一事象）。
- ② ①によって主体（第三者）が影響を被る（第二事象）。

第一事象を引き起こしたのも、第三者も、「意図性」及び「責任性」は担わない。

また、ke- -an 構文と同様、第三者の受身は、第一事象（独立した事象）が第三者にと

って「過分」と体感されることが必要な条件であると述べられている。

以上、湯浅がインドネシア語の受動構文を「意図性」及び「責任性」の観点より考察した結果は、以下のように整理することができる。

(31)

	di-	ter-	ke-an
動作主の「意図性」	○	—	—
動作主の「責任性」	○	—	—
被動者の「意図性」	—	—	—
被動者の「責任性」	—	○	—

表 7

このように田中（1991）、湯浅（2003）ではインドネシア語の受動が別々の角度から述べられている。次に、以下では、一般的な（または「通常の」）日本語の受動をどのようにインドネシア語で表現するかを述べることにする。

#### 2.4 日本語との対照におけるインドネシア語のその他の受動表現

その他の日本語の受動表現とそのインドネシア語の対照については、湯浅と田中で挙げられていないその他の様々な日本語の受動も、以下のようにインドネシア語で表現できる。

(32) 山田は田中に足を踏まれた。(持ち主の受け身、体の部分)

Yamada di-injak kaki-nya oleh Tanaka.

山田 di-踏む 足-彼 によって 田中

(33) 山田は田中に財布を盗まれた。(持ち主の受け身、持ち物)

Yamada di-curi dompet-nya oleh Tanaka.

山田 di-盗む 財布-彼 によって 田中

(34) 昨日の夜、私は赤ん坊に泣かれた。それでちっとも眠れなかった。(自動詞からの間接受身)

Kemarin malam, anakku me-nangis semalaman. Karena itu sedikitpun tidak

昨日 夜 子供-私 me-泣く 一晩中 それ故 少しも ~しない

bisa tidur.

できる 寝る

- (35) 新しいビルが建てられた。(モノ主語受身、一回的)

Gedung baru di-bangun

建物 新しい di-立てる

- (36) カナダではフランス語が話されている。(モノ主語受身、恒常的、動作主が問題にならない場合)

Bahasa Perancis di-pakai di Kanada.

語 フランス di-使う で カナダ

- (37) 私は財布を盗まれた。(モノ主語受身)

Aku ke-curian dompet.

私 ke-盗む-an 財布

- (38) 壁に絵が掛けられている。(モノ主語受身、結果状態の叙述)

Di dinding ter-gantung gambar.

で 壁 ter-掛ける 絵

- (39) 花子は太郎に／から愛されている。(感情述語の受身、特に動作主のマーカーに注目)

Hanako di-cinta-i oleh Tarou.

花子 di-愛する によって 太郎

- (40) 山田は田中に／から「麒麟」と言われた。(伝達動詞の受身、特に動作主のマーカーに注目)

Yamada di-katai / di-juluki Jerapah oleh Tanaka .

山田 di-言う di-名づける 麒麟 によって 田中

以上の例文からわかるように、ter-構文は大雑把に di-構文と同様に受動のカテゴリーとして分類されてきた。

## 2.5 先行研究の問題点

確かに、ter-構文は、di-構文に比べると使用頻度が高くはない。しかし、そもそも、インドネシア語の規範文法では、「受動」とは何かという適切な定義は述べられていない。インドネシア語教育における国語文法では、他動詞能動文の me-接頭辞と受動文の



di-接頭辞の交替は指導されているが、ter-構文、ke- -an 構文がどのように能動文と対応するのかははっきりしていない。これについては、Chaer (1993) が、「di-構文以外の受動態は受動化の過程に特定の統語形式に関わり、又前後文脈と無動作主に関わってくる」と述べているが、具体的なところまでは研究が進んでいない。たしかに、di-構文以外の受動態にはいろいろな制限が関わってくるため、me-接頭辞を di-接頭辞に変えるような機械的な構文変換はできない。

意味的特徴については、日本語の場合、きちんと多くの研究で区別されているが、インドネシア語では、あまり盛んに研究されていない。先に述べた寺村 (1982) の「受動態」の定義に従えば、それぞれの言語で、形態的特徴から意味的特徴までを取り扱う必要がある。

先行研究を踏まえて、本論文では以下の諸点について考察する。

1. 湯浅の(31)表 1 では、ter-構文は「動作をする側には”Volitionality”はなく、その事象に関する”Responsibility”は、むしろ動作をされる側にある」とされ、「自発的受身」のタイプに近く、したがって、スル型としての di-構文に比べると、ter-構文はナル型であると湯浅は述べている。

本研究では、ter-構文と volitionality 「意志性」とのかかわりをさらに深く探ってみたい。

2. 田中は ter-構文を日本語の「～てある」「～ている」に対応していると述べている。しかし、この「～てある」「～ている」の構文にどのような動詞が当てはまるか、どのような(動詞)プロセスが関わっているのかなどは述べていないので、詳しく見ていきたい。
3. ter-構文が典型的な受動ではないとすれば、どのような文法カテゴリーに分類されるのか。典型的な受動ではなくても、周辺的な受動として認められるのかどうかを見ていきたい。
4. さらに、全般的な問題として、ter-接頭辞が付いた構文は「受動完了」「自発」「可能」「無作為」の機能を持っている。機能は様々だが、インドネシア語ではすべてが受動構文であると言われており、その動機を明確にする。
5. di-、ter-、ke- -an が、全て「受動」として扱われているのはなぜだろうか。その動機を明確にしたい。また、その動機を踏まえて従来の受動の定義を考え直したい。

## 第4章

### 「結果状態」から見た ter-構文

#### 1. 動詞の種類と ter-構文の分布

ter-接頭辞自体の基本的な機能を Kridalaksana (1992) は以下のように分類した。

ter<sup>-1</sup> : すでに～された、完了

- (1) Kangkung yang baru saja ku-beli itu *ter-ikat* jadi satu.  
空苺菜 関係代名詞 ばかり 私-買う その ter-結ぶ なる ひとつ  
(私が買ったばかりの空苺菜はすでに (ひとつの) 束に結ばれた。)

ter<sup>-2</sup> : 自発的に

- (2) Ia sangat *ter-kejut* mendengar berita kematian pamannya.  
彼 とても ter-驚く meN-聞く 知らせ 死亡 叔父  
(彼は叔父さんの死亡を聞いて、驚いた。)
- (3) Ia *ter-pesona* melihat gadis yang lewat di depannya.  
彼 ter-引き付ける meN-見る 女性 関係代名詞 通った で 前  
(彼は前に通った女性を見て、(心を) ひきつけられた。)

ter<sup>-3</sup> : 可能的に

- (4) Apakah pembicaraan kita *ter-dengar* oleh orang lain?  
のか 話 私たち ter-聞く によって 人 他  
(私たちの話は他の人に聞かれたのか。)

ter<sup>-4</sup> : 方向・場所を指す

- (5) Rematik yang telah menahun itu kini *ter-tulang*.  
リウマチ 関係代名詞 すでに 慢性 その 今 ter-骨  
(長患いのリウマチが今骨までしみる。)

ter<sup>-5</sup> : 何かを被る (蒙る)

- (6) Ia tidak dapat melihat orang yang berlatih menembak  
彼 ~ません できる meN-見る 人 関係代名詞 訓練 射撃  
karena *ter-halang* tembok tinggi.  
ので ter-妨げる 壁 高い  
(高い壁に妨げられたため、彼は射撃の訓練が見られなかった。)

ter<sup>-6</sup> : 反復

- (7) Benda ringan akan *ter-apung* di air.  
もの 軽い 未来形 ter-浮かぶ に 水  
(軽いものは水に浮かんでいる)

ter-7 : 無意識的に

(8) Katanya, bukumu *ter-bawa* olehnya.

によると 本-あなた ter-持つ

(彼によると、あなたの本は彼に持たれてしまった)

以上の分類からも分かるように、ter-構文は日本語の受動態と同様に、「可能」(ter-3)、「自発」(ter-2)と関連している。本論文ではさらに、「すでに～された、完了」という意味を表わす ter-1 構文を観察する。ter-4 及び ter-6 はヴォイスの範囲から外れるため、本論文では取り扱わない。

## 2. 3つの受動の機能ドメイン

第1節で示した ter-構文の分布を踏まえ、本節では、ter-構文の機能を di-構文との比較を通して明らかにする。

Givon (1982) は、明確な受動の構造として、三つの異なる機能ドメインの合成が伴うということを述べている。

### A) Clausal topic assignment

能動節の主語・動作主がトピック役割としての働きはしないこと。代わりに、元々の非動作主の項が受動節のトピック役割をする。

### B) Impersonalization

能動節の主語・動作主が、受動節では意図的に隠される。

### C) Detransitivization

受動節は、意味的に能動よりも他動性が低くなる。能動節に比べ、より状態的である。

これらの三つの各機能ドメインは、それ自体で複雑であり、受動のさまざまなセクションを互いにカバーする。インドネシア語の ter-受動文は detransitivization の働きに近い。とはいえ、impersonalization としての働きも持っている。

本章では、まず、di-構文と ter-構文がどのように impersonalization と detransitivization の機能ドメインに関係しているのかを第3節で考察する。続く第4節では、「完了」と「継続」によって得られた「結果」をもとに ter-構文の働きの分析を試みる。

### 3. 受動の機能ドメインからみた ter-構文 (di-構文との比較)

#### 3.1 impersonalization 機能ドメイン

impersonalization というのは、動作主がないこと、あるいは「動作主の背景化」である。動作主の背景化は、態と密接に関係する。つまり、impersonalization と受動文との間には密接な関係が存在するのである。

いくつかの先行研究で (Schachter 1977、Tomlin 1980、奥津 1996 など)、基本的な受動文の機能は「動作主の背景化・消去」の他、「目的語の主題化」もメインの機能であると言われている。

確かに、ter-構文には目的語の主題化と動作主の背景化の機能があり、つまり受動文の必然的な特性を満たしている。

(9) Pohon-pohon di pekarangan ter-pangkas rapih.  
木-PL ~に 庭 ter-刈り込む きれい  
(庭では木がきれいに刈り込まれた。)

(10) Pohon-pohon di pekarangan di-pangkas rapih..  
木-PL ~に 庭 PREF-刈り込む きれい  
(庭では木がきれいに刈り込まれた。)

(11) Rak-rak ter-susun di pojok gudang.  
棚-PL PREF-揃う ~に 隅 倉庫  
(倉庫の隅に棚が揃えられている。)

(12) Rak-rak di-susun di pojok gudang.  
棚-PL PREF-揃う ~に 隅 倉庫  
(倉庫の隅に棚が揃えられている。)

(9)(11)は ter-構文、(10)(12)は di-構文である。両構文で、能動の元の目的語が主語となり、動作主は構文の表面に現れない。しかし、これだけでは、両構文の異同を明確に示すことはできない。

益岡 (1982) は「目的語の主題化」を「昇格」とする一方、「動作主の背景化」を「降格」と述べている。益岡の言う「昇格」「降格」にあたる概念は、普遍的な受動化の影響であると Perlmutter&Postal (1974) は述べている。彼らによって、直接目的語の昇格 (元の主語の降格も含める) は、目的語の前景化であり、受動態の一種として認められ

た。目的語が前景化されたため、構文内の他の要素よりも優位な位置に立つと考えられる。これに対して Tomlin (1980) は、受動文の最も考えやすい条件の一つは、主語（ここでは、動作・作用を受ける対象）が動作主よりも thematic であることだとする。しかし、動作主が受動文において不要な要素かと言えば、そうではない。確かに、動作主は、構文の表層構造には多くの場合表現されていないが、「何らかの形で」含意されている。とはいえ、受動文の動作主は通常、削除されているので、impersonalization のようにも見える。つまり、di-構文と ter-構文は両方とも impersonalization の機能ドメインを扱っている。

次に、ter-構文がどのように detransitivization（自動詞化）機能ドメインを扱っているのかを見ていく。

### 3.2 detransitivization（自動詞化）機能ドメイン

自動詞化ドメインは、一般的に形容詞としての働き、完了相、中間構文などの機能を含む (Siewierska 1984)。同様に、Givon (1994) も自動詞化構文の意味には完了、形容詞（的）、結果が含意されるとしている。本稿では、ter-構文を形容詞、完了、結果の機能の観点から検討することにする。

3.2.1 は ter-構文を動詞分類から確認する。次に、3.2.2 で「結果」の機能から確認する。

#### 3.2.1 動詞分類

以下に、自他対応の有無による動詞の分類を示す。この分類は基本的に寺村 (1982)、宮島 (1985)、早津 (1990) によるものである。また、対応するインドネシア語も挙げる。

対応の有無と動詞の分類：

相対自動詞（有対自動詞）<sup>8</sup>

例：壊れる (rusak), 焦げる (ter-panggang/ter-bakar), 決まる (tetap), 始まる (mulai),  
砕ける (hancur/retak), 付く (ter-pasang), 染まる (ter-semir)

相対他動詞（有対他動詞）

---

<sup>8</sup> 寺村の「相対自動詞」「相対他動詞」を早津、宮島などでは「有対自動詞」「有対他動詞」としている。以下、「有対自動詞」「有対他動詞」と呼ぶ。さらにそれに対応するものを「無対自動詞」「無対他動詞」と呼ぶ。

例：壊す (me-rusak-kan), 焦がす (me-manggang/mem-bakar), 決める (me-netapkan), 始める (me-mulai), 砕く (meng-hancur-kan/me-retak-kan), 付ける (me-masang), 染める (me-nyemir)

絶対自動詞 (無対自動詞)

例：走る (ber-lari), 働く (bekerja), ある (ada), 住む (tinggal), 光る (ber-sinar), 泳ぐ (berenang), 騒ぐ (me-ngganggu), いる (ada), 転ぶ (jatuh)

絶対他動詞 (無対他動詞)<sup>9</sup>

例：押す (men-dorong), 置く (me-letak-kan), たたく (me-mukul), 塗る (menge-cat), 結ぶ (meng-ikat), 探す (men-cari), 調べる (me-meriksa), 干す (men-jemur), ほめる (me-muji)

上述の相対自動詞 (有対自動詞) を絶対他動詞 (無対他動詞) と比較すると、相対自動詞 (有対自動詞) には *ter-*接頭辞がよく出てくることがわかる。これは、*ter-*接頭辞にはもともと自動詞としての働きがあるためである。従って、絶対他動詞 (無対他動詞) には自動詞の働きがないため、*ter-*接頭辞は用いられない。

早津 (1990) は有対他動詞と無対他動詞について、以下のような特徴があると述べている。

- A) 有対他動詞には、働きかけの結果の状態に注目する動詞が多い。
- B) 無対他動詞には、働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い。

また、宮島 (1985) では、「結果性」という観点から動詞が三つの種類に分けられている。「基本的には、結果を表す動詞」、「基本的には、動作・作用を表す動詞」、「結果の段階に問題のある動詞」の三つである。「基本的には、結果を表す動詞」には有対他動詞が多く、「基本的には、動作・作用を表す動詞」には無対他動詞が多いことがわかる。なお、「結果の段階に問題のある動詞」には自動詞しかない。

---

<sup>9</sup> Pardeshi (2000:15) は、他動性をめぐるアプローチ法をふたつにわけると述べている。

One of them treats transitivity as a dichotomy based on the presence vs. absence of a direct object ("polar" approach) while the other understands it as a continuum along which clauses with varying degrees of transitivity-adjusted on the basis of a number of semantic parameters- can be arranged ("scalar approach).

さらに、前者を *syntactic transitivity* と呼び、後者を *semantic transitivity* と呼んでいる。目的語をとるか否かで自動詞か他動詞かを判断するのは *syntactic transitivity* の考え方である。さらに、中川 (2004) では、「日本語の場合は格助詞「を」をとるという伝統的な *syntactic transitivity* であるが、これによって他動詞か自動詞という極端な立場をとる研究者は少ない。多くの研究者は「を」を指標としながらも、さらに意味的な基準を加えて、自他の判定を行っている。」としている。

早津と宮島をまとめると、有対他動詞には「働きかけの結果として生じる状態」を含む動詞が多いのに対し、無対他動詞には「結果として生じる状態」を含意しないものが多いことが明らかになった。

上の動詞分類のインドネシア語訳から、動詞語幹につく接頭辞は以下のように整理することができる。

(13) 有対自動詞相当<sup>10</sup> : ter-・φ (無接頭辞)

有対他動詞相当 : meN-

無対自動詞相当 : ber-・φ (無接頭辞)

無対他動詞相当 : meN-

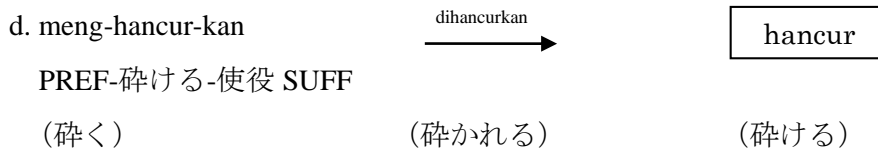
meN-は有対他動詞・無対他動詞に同じように付くが、有対他動詞は「働きかけの結果状態に注目する動詞」であるのに対して、無対他動詞は「働きかけの過程に注目する動詞」である。つまり、meN-が二つの異なる働きを持っていることがわかる。

以上から、ter-構文は有対自動詞的機能を持つと考えられる。つまり、他動詞ペアがある自動詞である。しかし、ペアと言っても、一対一で対応したペアではない。むしろ、meN-接頭辞で表す能動文を di-接頭辞で表す受動が先に生じ、その結果 ter-構文が得られる。

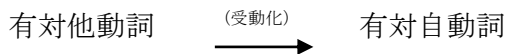
有対自動詞では、他動詞語幹が行う動作・行為から、結果として有対自動詞で描写される状態になる。ただし、有対自動詞を作る際に必ずしも ter-接頭辞が付く訳ではない。

(14) a. me-nyemir	disemir	ter-semir
PREF-染める	→	
(染める)	(染められる)	(染まる)
b. me-motong	dipotong	ter-potong
PREF-切る	→	
(切る)	(切られる)	(切れる)
c. me-rusak-kan	dirusakkan	rusak
PREF-壊れる-使役	→	
(壊す)	(壊される)	(壊れる)

<sup>10</sup> 有対自動詞と同様の機能を持つという意味で使用する。



要するに、上記は以下のように表すことができる。



(14)の例文から見ると、(14a,b)では *ter*-動詞ができるが、(14c,d)は  $\varphi$  (無接頭辞) で示されている。しかし、これらは、(13)で示したとおり、すべて有対自動詞である。この(14a)「*menyemir—tersemir*」(14b)「*memotong—terpotong*」(14c)「*merusakkan—rusak*」(14d)「*menghancurkan—hancur*」のようなペアに関して、*meN*-接頭辞で表されている動詞には動作主がある一方、*ter*-接頭辞で表されている動詞にはその存在が希薄であり、結果状態が際立っている。ただし、意味的には動作主の存在が前提とされている。 $\varphi$  (無接頭辞)の(14c)*rusak* (壊れる)も同様に、最終的な結果があることを意図して、*me-rusak-kan* (壊す)という動詞を使う。つまり、*rusak* という語の概念自体は *me-rusak-kan* という動作に潜在的に含意されている。影山 (2000) ではこれを「脱使役化」と指摘している。「*menyemir - tersemir*」(染める - 染まる)のようなペアは、使役構造の語彙概念構造において、動作主が抑制されるという外項抑制の働きを受けている。外項要素は(14c,d)「*merusakkan, menghancurkan*」の-*kan* から捉えることができる。-*kan* はインドネシア語の接尾辞の一つである。Kridalaksana (1992) の接辞の分類によると、この接尾辞は多く、能動文の *meN*-接頭辞と結合される (つまり、「*meN- -kan*」という接頭尾辞を構成する)。この接頭尾辞は動詞 (特に、他動詞) を構成する機能がある。つまり、元々動詞ではない品詞はこの動詞化によって (派生) 動詞を構成することができ、さらに意味的重点は「*membuat jadi*~」(~するように、させるように) という点にあり、つまり「*causative*」と関係がある。「-*kan*」接尾辞 (日本語の「~させる」、つまり統語的な使役に相当している) は、いわば使役接尾辞で、使役構造を用い、ある対象に行為をさせ、ある物に働きかけることを表わす。

一方、(14a,b)の「*menyemir, memotong*」のような-*kan* 接尾辞無しの *meN*-構文には動作主の意図性はないのだろうか。勿論そうではない。前章で見たように、インドネシア語の受動文は典型的に *di*-接頭辞が付けられる受動文であり、これに対応する能動文は典型的に *meN*-接頭辞が付けられた能動文である (Chaer 1993, Alwi 1998)。受動文の





(18) \*rambut ter-potong pendek oleh tukang cukur dan memakai kaca mata.

髪 ter-切る 短い によって 床屋 と かける 眼鏡  
(床屋によって短く切られている髪で、眼鏡をかけている。)

(19) \*bantuan siswa miskin ter-potong oleh Departemen Pendidikan

援助 学生 貧乏な ter-切る によって 教育省  
(貧乏な学生の援助(金)が教育省によってカットされた。)

更に、上述の(14)の矢印の右端にある無接頭辞の rusak (壊れる)、hancur (砕ける) は、インドネシア語では形容詞的な自動詞に分類されている。ter-potong (切れる) や ter-semir (染まる) も矢印の右端に位置しているので rusak、hancur と同様に (自動詞的) 形容詞的な働きをしている。

したがって、ter-接頭辞が付いた動詞は自動詞化されているとともに、(自動詞的) 形容詞的な働きをしていると考えられ、Siewierska (1984)、Givon (1994) の detransitivization の機能ドメインを満たしている。

次に、「結果状態を表す」ter-構文に目を転じる。

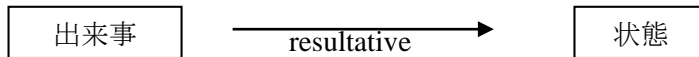
### 3.2.2 「結果状態」の ter-構文

3.1 節で論じた受動の機能ドメインからわかるように、ter-構文でも動作主の抑制が構文内に表されている。つまり、動作主、または動作主の動作より、むしろ動作の結果が明確に示されている。有対自動詞として扱われている ter-構文を有対他動詞の meN-から派生したものとして働きかけの結果の状態に注目すると、meN-構文から di-構文を通して ter-構文に至るこの過程は、ter-構文が受動から派生した構文とはいえ、「受動性」が希薄になり、代わりに、「結果状態」が際立っている。そのため、Passive より Resultative に近いと Nedjalkov (1988) は述べている。

Resultative を表す構文は、日本語では結果構文である。結果構文は、動作主がある行為を行う上位事象と、それによりもたらされる結果状態を表す下位事象とが CAUSE (使役関係) を介して合成したものであると影山 (1996) が述べている。影山を基にすると、ter-構文は、3.2.1 で触れた影山 (2000) の「脱使役」が作用した結果である。ter-構文をなぞると、(15) [x CAUSE [y BECOME[y BE AT-z]]] の x CAUSE の部分に di-構文を埋めることができる。3.2.1 で示したように、「直接受身」の di-構文は動作主を表すことができるため、CAUSE を表している。この di-構文を「出来事」を表す上位事象として考える。

一方、ter-構文は、「di-構文の「出来事」を（出来事の）の結果としてもたらされた「状態」に切り換える」Resultative を表す構文といえるだろう。

(20)



Resultative には Perfect (完了)、Stative (状態)、Durative (継続) が関連している。Nedjalkov (1988) によると、Resultative に対して、各言語では以下の用語も用いられている。

(21)

- 1 Stative (ドイツ語、ロシア語、中国語)
- 2 Resultative: (フランス語)
  - 2.1 Resultative Stative、Stative と Resultative の結合体であり、Resultative に一本化されている。
- 3 Perfect (アーチ語)
  - 3.1 Statal Perfect、Stative と Perfect の結合体である。(ブルガリア語)
- 4 Passive (エスキモー語)
  - 4.1 Statal Passive/Passive of State : Stative と Passive の結合体である。(ドイツ語、英語、ロシア語)
- 5 The Continuous (Durative) Aspect (日本語)
  - 5.1 Durative Accomplishment

実際、ter-構文でもこれらの現象が関わってくる。

(22) a. Buku- buku sudah ter-susun rapi. <完了>

本-PL すでに~した ter-並ぶ きちんとした  
(本はきちんと並んでいた。)

b. Buku-buku dalam kondisi ter-susun rapi. <状態>

本-PL に 状態 ter-並ぶ きちんとした  
(本はきちんとした状態に並んでいる。)

c. Buku-buku *masih* ter-susun rapi.

〈継続〉

本-PL まだ ter-並ぶ きちんとした

(本はまだきちんと並んでいる。)

上の例文では、(21a)「完了」を表す *ter*-構文に更に”*sudah*”をつけると、「完了」の意味がより強くなる。(21b)「状態」は”*dalam kondisi*” ((の) 状態に) 句で表されている。そして、(21c)「継続」は”*masih*” (まだ) によって補われている。

*ter*-構文全体の意味としては「完了」の意味がベースになり、「脱使役化」で過去の動作が希薄になり、状態そのものが表面に現れる。そうすると、*ter*-構文は「受動態の過程から得た完了状態」と定式化できる。

つまり、本稿で結果構文として扱う *ter*-構文は、受動文にさかのぼる。*ter*-構文は「完了」から始まる。この「完了」は *di*-構文から引き継いだものである。

このように、3.1 と 3.2 の考察から、*ter*-構文は *di*-構文と同様に *impersonalization* と *detransitivization* の機能ドメインを満たしていると言える。つまり、この受動の機能ドメインを満たしている *ter*-構文には受動としての働きがあると言うことができる。

「完了」と「受動」の関連については Comrie (1976:86) が次のように述べている。「パーフェクトは過去の動作を現在の状態に関係づける。つまり、現在の状態をある過去の動作の結果として表現することができる。多くの言語では、受動の古い形式は同じように状態的である。」

また、「状態」と「受動」の関連についても、Comrie (1976:86) は次のように述べている。

1. When an action involving an agent and an object takes place, the resultant change in state is usually more apparent in the object than in the agent, as in *the enemy has destroyed the city*.
2. With transitive verbs, therefore, the most usual state resulting from an action will be the changed state of the semantic object of the action, in the example given a change in the state of the city.
3. The perfect passive is precisely that form which predicates a change of state to the object of an action.

#### 4. ter-動詞の Target State と Resultant State

Rizki (2004)<sup>11</sup>は、ter-構文を Passive of State とし、di-構文を Passive of Change として区別している。しかし、どのような動詞が Passive of State に分類されるかは述べていない。

動詞による ter-構文の意味の違いを考察するために、Kratzer (2000) が State Passive の研究で用いた Parsons (1990) の Target State と Resultant State の区別を取り上げる。

- A) Target State: state holding at the culmination of an event (with which it is canonically associated)
- B) Resultant State: the state of the named event having culminated; states which are apparently not reversible

本稿では、この Target State と Resultant State を踏まえて、ter-接頭辞がつけられる動詞を以下のように分類した。

---

<sup>11</sup> Rizki (2004) の概要は以下の通り。

インドネシア語には受動文が3つある。それぞれ、di-接頭辞、ter-接頭辞、ke-·an 共接辞を付ける受動文である。インドネシア語の受動文の意味は、「主語そのものが動作や行為を受ける」ということであり、さらにその動作・行為は「働きかけ」と考えられ、それによって対象になるものには変化が生じ始める。ter-構文は di-構文と交替できる場合もあるし、交替できない場合もある。直接的に di-構文と交替できない場合、使役マーカ-kan 接尾辞と結合された di-構文（つまり、di-kan 構文）と交替する。交替できるのは、やはり類似点があるからであろう。受動文が表わす意味のうち、「(動作の) 働きかけ」は di-構文で表わせる。また、それによってもたらされた「(変化) の結果」が持続している場合、ter-構文で表される。つまり、「結果の継続」が di-構文と ter-構文の相違点と考えられる。

したがって、di-構文は「変化の受動文=Passive of Change」である一方、ter-構文は「継続的受動文=Passive of State」と考えることができる。「変化の受動文」がまず成立して、そこから結果が生じ、さらにその結果が持続している場合、「継続的受動文」が派生する。

## (23) Target State

	動詞	<i>KBBI</i> <sup>12</sup> の意味
a	me-motong meN-切る	memendekkan (短くする)
b	memecahkan meN-割る	menjadi pecah-pecah: terbelah menjadi beberapa bagian (粉々になる ; いくつかの部分になる)
c	menyemir meN-染める	menggilapkan dengan semir (ぴかぴかに磨く)
d	mencuci meN-洗う	membersihkan dengan air atau barang cair, biasanya sabun (水か液体のもの (石鹸など) を使ってきれいにする)
e	mengecat meN-塗る	mewarnai dengan cat (色があるもの (ペンキなど) で色をつける)
f	membuka meN-開ける	menjadikan tidak tertutup (閉まらないように開ける)

## (24) Resultant State

	動詞	<i>KBBI</i> の意味
a	membaca meN-読む	melihat serta memahami isi dari apa yang tertulis (書いてあるものを見て, 理解する)
b	makan 食べる	memasukkan sesuatu ke dalam mulut, kemudian mengunyah dan menelannya ((何かを) 口に入れ, 嚙んで, 飲み込む)
c	minum 飲む	memasukkan air ke dalam mulut dan meneguknya (液体 (水など) を口に入れ, 飲み込む)

(23)Target State に分類した動詞は、(15) の[y BECOME[y BE AT-z]]に入れてみると以下  
のようになる。

(25) [x CAUSE [y BECOME[y BE AT-[SHORT]]] (=54a)

(26) [x CAUSE [y BECOME[y BE AT-[SMALL PIECES]]] (=54b)

(27) [x CAUSE [y BECOME[y BE AT-[SHINE]]] (=54c)

<sup>12</sup> *KBBI* はインドネシアで最も権威のある大辞書 (1988)、*Kamus Besar Bahasa Indonesia* の略である。

- (28) [x CAUSE [y BECOME[y BE AT-[CLEAN]]] (=54d)  
 (29) [x CAUSE [y BECOME[y BE AT-[COLORED]]] (=54e)  
 (30) [x CAUSE [y BECOME[y BE AT-[NOT[CLOSED]]]] (=54f)

つまり、Target State に使われる動詞は早津（1989）の有対他動詞（23a: memotong 切る；23b: memecahkan 割る；23c: menyemir 磨く；23f: membuka 開ける）でもあり、無対他動詞（23d: mencuci 洗う；23e: mengecat 塗る）でもある。有対他動詞の場合、(15)の[y BE AT-z]に含意されている「内項」の意味構成要素（例えば“shine (=27)”）は特定の語彙項目（この場合は“磨く”(=23c)）に関連付けられた「implicature」の一種である<sup>13</sup>。そして、無対他動詞の場合、(15)の[y BE AT-z]に相当する「内項」はないが、それぞれの動作（例えば、23d: mencuci 洗う；23e: mengecat 塗る）にはある目的があると考えられるため、本稿では、「内項」と同様に扱っている。

したがって、(23)の Target State を表わす動詞を ter-動詞にすると、(15)の[y BE AT-z]を付け加えることができる。

(31)				
(a)	memotong	→	ter-potong	pendek (短く切れた)
	meN-切る		ter-切る	短い
(b)	memecahkan	→	ter-pecah	berkeping-keping (粉々に割れた)
	meN-割る		ter-割る	粉々
(c)	menyemir	→	ter-semir	mengkilap (ぴかぴかに磨かれた)
	meN-磨く		ter-磨く	ぴかぴか
(d)	mencuci	→	ter-cuci	bersih (きれいに洗った)
	meN-洗う		ter-洗う	きれい
(e)	mengecat	→	ter-cat	merah (赤く塗っている)
	meN-塗る		ter-塗る	赤い
(f)	membuka	→	ter-buka	lebar (広く開いた)
	meN-開ける		ter-開ける	広い

<sup>13</sup> この意味構成要素はおそらく、各語彙に含意されている内項だと思われる。これが Talmy (1991) の言うところのメトニミー拡張である。

(31b,d,e)を以下の例文で見してみる。

(32) Challenger ter-pecah berkeping-keping.

チャレンジャー ter-砕く バラバラに

(チャレンジャーは、バラバラに引き裂かれた。)

(33) Botol bekas wine sudah ter-cuci bersih.

ボトル 使用された ワイン すでに ter-洗争する きれいに

(ワインのボトルはきれいに洗淨されている。)

(34) Kayu ter-cat hitam pekat

木材 ter-塗る 黒い 濃い

(木材が真っ黒に塗られた。)

一方、Resultant State に使われる動詞は無対他動詞しかない。Target State の ter-動詞と違って、行われる動作に「内項」と同様に扱われる目的を想定できないため、(15)[y BE AT-z]の部分に意味構成要素を入れ込むことができないからである。この場合、むしろ、(15)[y BE AT-z]の部分[y BE AT-FINISHED STATE]に変えた方が良い。なぜなら、これらの動詞は単に行動・動作を表現しているからである。

(66)

(a) mem-baca → ter-baca (読まれる)

meN-読む ter-読む

(b) makan → ter-makan (食べられる)

食べる ter-食べる

(c) minum → ter-minum (飲まれる)

飲む ter-飲む

## 5. まとめ

この章では、構文が表している行為・変化・結果状態の連鎖から見るならば、di-構文と ter-構文の意味構造は「主語が何らかの行為を受ける」ということであり、さらにその行為は「働きかけ」として考えられ、それによって対象になるものに変化が生じ始め



ることを見た。しかし、ter-構文ではこの動作主の存在が希薄になり、「結果状態」が際立っている。そのため、「受動文」より「結果構文」に近いということを論じた。また、di-構文は「出来事」を表す一方、ter-構文は「di-構文の「出来事」を出来事の結果としてもたらされた「状態」に切り換える」resultative 構文とすることができる。そこで、ter-構文は、小野(2004)の「目的語結果構文」、Nedjalkov(1988)の“Objective Resultative“の用語を基に、「被動作主前景の結果構文」と呼ぶことができる。

## 第5章

### ter-構文と「はたらきかけ」・「結果」の相関

#### 1. di-構文と関連する ter-構文における「はたらきかけ」と「結果」

本論文で扱う ter 構文は、ほとんど di-構文と交替することができるため、di-構文と同じように見える。しかし、時制から見れば、ter-構文は動詞に描かれた動作・行為が終わってそのままになっている状態、つまり「完了の状態動詞」の意味を表すことが多い。一方、di-構文はそこまでの意味は含まない。このことを辞書で調べてみると、ある ter-構文（例えば、tertanam（植えられた、植わった）、tertulis（書かれた、書いてある）、tertangkap（捕まえられた、捕まった））の意味は次のように説明されている。

- |     |               |           |                    |
|-----|---------------|-----------|--------------------|
| (1) | ter-tanam     | : sudah   | di-tanam-(kan)     |
|     | ter-植える       | すでに       | di-植える-使役          |
|     | (植えられた、植わった)  |           |                    |
| (2) | ter-tulis     | : (sudah) | di-tulis ter-surat |
|     | ter-書く        | すでに       | di-書く ; ter-手紙     |
|     | (書かれた、書いてある)  |           |                    |
| (3) | ter-tangkap   | : (sudah) | di-tangkap         |
|     | ter-捕まる       | すでに       | di-捕まる             |
|     | (捕まえられた、捕まった) |           |                    |

(Kamus Besar Bahasa Indonesia 1991)

これらの例により、di-構文と ter-構文の交替が可能かどうか明らかになる。「sudah」（すでに～）は（ ）の中にあるものも含め、全ての例の説明で用いられている。また、ここで注目したいのは、ter-構文が di-構文だけで説明されているのではなく、接尾辞-kan が付けられた di-構文でも説明されていることである。その例は(1)の ter-tanam（植えられた）に見られる。「sudah di-tanam」の直後の（ ）にある接尾辞-kan は、前章で見たように、「causative」と関係があり、「meN- -kan」という接頭尾辞を構成して、元々動詞ではない品詞は、この動詞化によって（派生）動詞を派生することができる。具体例として以下の例文を見てみよう。

(4) 動詞➡動詞 「使役」

Pilot itu me-nerbang-kan pesawat model mutakhir buatan  
パイロット それ PREF-飛ぶ-使役 飛行機 型 最近 製  
Amerika  
アメリカ

(そのパイロットはアメリカ製の最新型の飛行機を飛ばした。)

(5) 名詞➡動詞 「使役」

Penduduk primitive itu me-raja-kan dokter yang sedang  
住民 原始的 それ PREF-王様-使役 医者 関係代名詞 進行形  
ber-praktek.  
PREF-診察

(原始的な住民は彼らの地区(で診察している)のお医者さんを王様のように扱う。)

(6) 形容詞➡動詞 (～のようになる)「使役」

Adik-ku meng-hitam-kan warna gambar-nya.  
弟-私 PREF-黒い-使役 色 絵-彼

(弟は絵を黒くした。)

(7) 数詞➡動詞

Kami berusaha me-nyatu-kan pendapat kami yang berbeda.  
私たち 努力する PREF-一つ-使役 意見 私たち 関係代名詞 一致しない  
(私たちは互いに一致していない意見を統一することに努力する。)

以上の例文には「causative」(使役)の意味が強く感じられる。実際、「causative」は接頭辞 meN-でなく、接尾辞-kan に重点がある。何故このようなことが言えるのであろうか。

先述の通り、接尾辞-kan は接頭辞 meN-と結合されることが多いが、他の接頭辞と結合することもできる。具体的には、接尾辞-kan は他に4つの接辞と結合することができる<sup>14</sup>。接尾辞-kan と構成された全ての共接辞は動詞を構成するという働きをもち、さらに意味的重点は「membuat jadi～」(～するように、させるように)という点、つまり「causative」にある。

さて、接尾辞-kan は ter-構文の分類とどのような関係があるのか。インドネシア語には受動文が3つある。それぞれ、di-接頭辞、ter-接頭辞、ke-

-an 共接辞を付ける受動文である。インドネシア語の受動文の意味は、「主語そのもの

<sup>14</sup>それぞれ「memper-」(「共接辞 memper-kan」を構成する)、「diper-」(「共接辞 diper-kan」を構成する)、「ber-」(「共接辞 ber-kan」を構成する)、「per-」(「共接辞 per-kan」を構成する)である。

が動作や行為を受ける」ということであり、さらにその動作・行為は「働きかけ」と考えられ、それによって対象になるものには変化が生じ始める。ter-構文は di-構文と交替できる場合もあるし、交替できない場合もある。直接的に di-構文と交替できない場合、使役マーカ-kan 接尾辞と結合された di-構文（つまり、di-kan 構文）と交替する。交替できるのは、やはり類似点があるからであろう。受動文が表わす意味のうち、「(動作の) 働きかけ」は di-構文で表わせる。また、それによってもたらされた「(変化) の結果」が持続している場合、ter-構文で表される。つまり、「結果の継続」が di-構文と ter-構文の相違点と考えられる。

以上で幾つかの ter-構文と di-構文が交替可能な構文と交替不可能な構文を見てきた。この「交替できる」、「交替できない」ということは以下の手順で確認することができる。まず、動詞の語幹の意味を辞書で調べる。ter-構文、そして他の接辞で構成された構文はそれぞれ、そのままの形で書いてあるが、受動文 di-構文は載っていない。なぜなら、受動文は能動文から派生するため、能動文の me-構文から自動的に導かれる di-構文は載せられていないからである。インドネシア語の能動文は基本的に「接頭辞 meN-+語幹」から構成されるが、meN-構文に接尾辞-kan が付く場合も少なくない。さらに、この me-構文と me-kan 構文は、形式は異なっても意味の差は感じられない<sup>15</sup>。

di-構文と交替可能かどうかによって、ter-構文はさらに3つに分類される。それぞれが表わす意味は、「働きかけ」及びそこから出た「結果」、そして「完了」である。これらについて、次節で議論する。

## 2. di-構文と交替可能三つの ter-構文

### 2.1 di-kan 構文としか交替できない「ter-構文タイプ1」

このタイプは、接尾辞-kan の意味によって、対象にある働きかけをする(日本語の「...させる」、つまり使役に相当)。接尾辞-kan によって示された「働きかけ」は ter-構文が派生する過程でどのように表されているのだろうか。これを説明するために以下の(8) ter-gabung という例を見てみよう。

- (8) Titik A dan titik B ter-gabung dalam satu garis.  
点 と点 ter-結びつける 中 一つ 線  
(A 点と B 点を一つの線に結び付けた。)

<sup>15</sup>接尾辞「-kan」について、「授与動詞となるもの」；「具格動詞となるもの」；「目的格動詞（例：meminjam（借りる）と meminjamkan（貸す）」を除いて、meN-kan 構文と meN-構文の意味はほとんど同じである。

*ter-gabung* という構文は能動の *meng-gabung-kan*、つまり *meN-* *-kan* 構文と対応している<sup>16</sup>。*meN-* *-kan* 構文は、*me-*構文と同様に他動詞用法であり、表現の重点は動作主による動作・行為にある。しかし、*me-*構文と違って、接尾辞-*kan* の特性があるため「積極的に動作・行為を対象にしかける」という意味が強い。この-*kan* によって示された「働きかけ」がなければ、事態は発生しない。「働きかけ」によって動作主の意図が現れてくる。つまり、*me-* *-kan* 構文では意図的な動作主が前提となる。

一方、*meN-*構文には動作主の意図性はないかということ、勿論そうではない。インドネシア語の受動文は典型的に *di-*接頭辞が付けられる受動文であり、これに対応する能動文は典型的に *meN-*接頭辞が付けられた能動文である (Chaer 1993、Alwi 1998)。*di-*構文は「直接受身」を構成するため、使える動詞は他動詞しかない。したがって *di-*構文に対応する *meN-*構文の動詞も他動詞である。*meN-* *-kan* 構文と比較すると、*meN-*構文の方が元の形で、*meN-*構文が基盤になり、それに接尾辞-*kan* が付き (この接尾辞の意味も付加され)、そこから構文が派生すると考えられる。つまり、*meN-*構文は基本的に、*meN-* *-kan* 構文は派生的である。要するに、*meN-*構文でも動作主の意図を否定することはできないが、*meN-* *-kan* 構文を派生させると、動作主の存在がより強く感じられる。

*meN-*構文、*meN-* *-kan* 構文から、*di-*構文と *di-* *-kan* 構文が出現する。受動化すると、表現の重点は動作主による動作・行為からその動作・行為を受ける被動作者に移る。この「被動作主」は受動文の主語になり、その主語に対して「何かがなされた」と理解されなければならない。このような解釈をする際、五感で (典型的には視覚で) 主語に「何らかの変化」があるように捉えるであろう。その変化は物理的な変化でも心理的な変化でも構わない。ここで、(8) に対応する *di-kan* 構文も見てみよう。

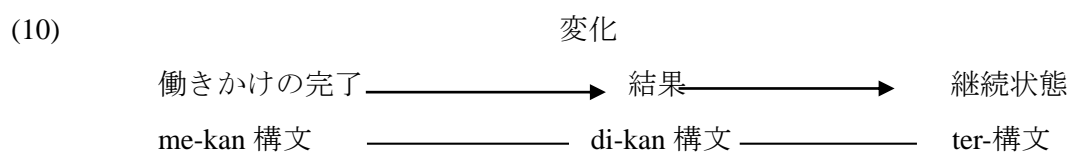
- (9) Titik A dan titik B di-gabung-kan dalam satu garis  
点 と 点 di-結びつく-使役 中 1つ 線  
(A点とB点を一つの線に結び付けた。)

この2つの構文の意味構造は「一つに結び合わせる事」であり、つまり *me-kan* 構文の意味に由来している。「結合する」という事態の成立に何らかの動作が必須の要件として加えられていなければ、その事態は起こらない。働きかけがあつて、そこから「変

<sup>16</sup>語幹の最初の音によって *me-*接頭辞の形が変わる。

化」が生じる。視覚的に何らかの違いが捉えられて、「変化」があると言えるのである。

*tergabung* の場合、視覚で捉えられた変化は「(ある対象物が)すでに1つになった(結合した)」ということである。変化があつて、そのまま「結果の状態」が続いている。目の前に現れているものは過去の動作の結果として表現されている。視覚で捉えられたもの(事態)は、過去のある時点に実現したものである。したがって、(8)は、現在のある状態を過去のある既然の状態と結び付ける表現として理解できるであろう。以上をまとめると、以下のように表すことができる。



di-kan 構文と ter-構文は同じ「働きかけ」から出発している。ただ、到着点は異なっており、di-kan 構文は「結果」に重点がある一方、「ter-」構文は「継続状態」まで含んでいる。

このタイプに含まれる他の ter-構文の具体例を見てみよう。

- (11) Jatah pensiun selalu ter-sedia untuk pegawai negeri  
配給 年金 いつも ter-用意する のために 社員 国  
(公務員のために割り当て恩給がいつも用意された。)
- (12) Di atas meja ter-saji nasi, lauk dan buah-buahan  
~に 上 机 ter-供する ご飯 おかず と くだもの・PL  
(ご飯、おかずと果物が机の上に供されている。)
- (13) Kamera ter-sembunyi  
カメラ ter-隠れる  
(隠されたカメラ。)

## 2.2 di-構文と交替できる「ter-構文タイプ2」

接尾辞-kan が付けられていないと「働きかけ」、またはそれをもたらす「動作主」は意味構造に含意されないのだろうか。実は、そうではない。「ter-構文タイプ2」に含まれる動詞は元々他動詞であるため、「動作主」やそれによる「働きかけ」を否定することはできない。そして、接尾辞-kan が付けられた構文との違いは、前述のように、接尾辞-kan がある場合、ある対象物が結果の状態になるまで、動作主の存在(働きかけ)が

必須の条件となる。つまり、動作主が絶対的であるため、それが構文内に現れていなくても、その存在が強く感じられる。一方、接尾辞-kan が付いていない場合でも、元来他動詞であるため、当然動作主の存在が推測できる。しかし、その存在は希薄にしか感じられない。この場合、「ter-構文タイプ1」と比較すると、「ter-構文タイプ2」の動作主は「潜在的な動作主、implicit agent」と言えるであろう。それに対して、「ter-構文タイプ1」の動作主は「顕在的な動作主、explicit agent」と考えられる。「潜在的な動作主」が含意される出来事では、当然、その動作主の存在は不問になる。つまり、「働きかけ」そのものは表現できず、「結果の状態」そのものが目立つ「自動詞表現」となる。「ter-bakar」(焼けた)、「ter-tutup」(閉じた)、「ter-buka」(開いた)、「ter-potong」(切れた)、「ter-cabut」(抜けた)、「ter-timbun」(埋まった)はそのように説明できる。影山(2001:38)は「「他力によるのではなく、自力で～した」と見なされる場合、自動詞表現が得られる」と述べている。

(14) Sepanjang tahun 2000 belasan ribu rumah penduduk ter-bakar.

～の間 年 数 千 家 住民 ter-焼く

(2000年間に数千の住宅が焼けた。)

(15) Lemari itu tertutup rapat.

棚 それ ter-閉まる きちんと

(その棚はきちんと閉まっている。)

(16) Sepetak halaman rumput terlihat sangat terawat karena ter-potong rapi.

畦 庭 草 見える とても 手入れる ～ので ter-切る きれいに

(畦の庭の草はきれいに切られているので、とても手入れされているように見える。)

### 2.3 di-構文とも di-kan 構文とも交替できる「ter-構文タイプ3」

「ter-構文タイプ3」は「ter-構文タイプ1」と「ter-構文タイプ2」の連合として考えられる。また、含意される意味には「完了」と「自動詞表現」がある。したがって、ter-構文によって描かれている事態は「誰かによってなされた結果」の場合でも、「結果そのものが自然に知覚される」場合でもよいのである。意味構造は、後者を重視すると「自動詞表現」になり、前者を重視すると「完了」になる。具体例を以下に示す。

- (17) Sampah tertumpuk di pojok jalan.  
 ゴミ ter-積み重ねる に 角 道  
 (ゴミが道角に積み重ねられた。)
- (18) Tembakan panah ter-lepas ke arah musuh.  
 発射 矢 ter-放つ ~へ 方向 敵  
 (発射矢は敵の方に放たれた。)
- (19) Pohon anggur itu ter-tanam di tanah yang subur.  
 木 ぶどう それ ter-植える に 土 関係代名詞 肥沃な  
 (そのぶどうの木は肥沃な土に植わっている。)

例えば、(19)のように「pohon anggur (ぶどうの木)」が「ter-tanam (植わっている)」という結果が得られるためには、間違いなく背後に人が存在する。しかし、植わっているぶどうの木を自然な事態・事象として捉えることも可能である。

以上、di-構文と交替可能か交替不可能かによって、ter-構文が3つに分けられることを見てきた。

### 3. 'affectedness' 「影響性」が強い ter-構文

上で述べた di-構文と交替可能な ter-構文を「対照への働きかけ」から見ると、「影響性」が関わっている。

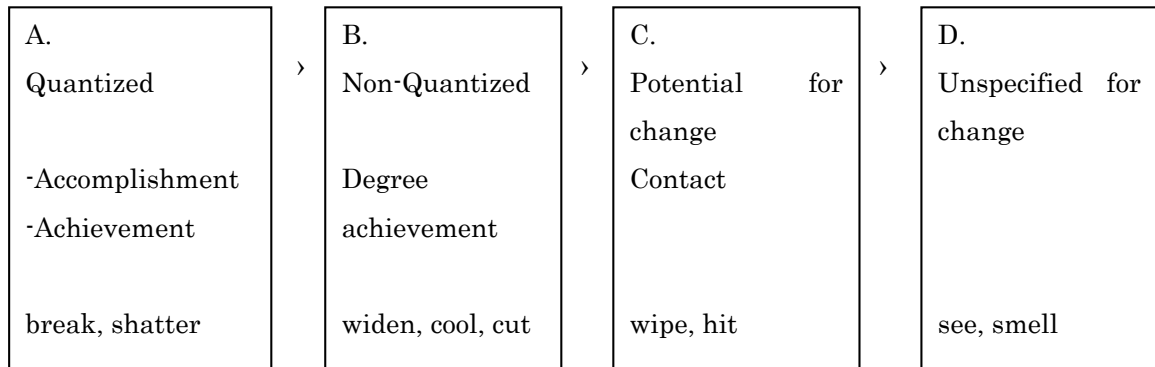
影響性は統語操作上の制約で、受身、中間構文及び使役化に関係付けられている (Beavers, 2011)。また、影響性は他動詞であるか否かを把握するために仮定されている (Tsunoda, 1991)。

Hopper and Thompson (1980) は、被動作主が動詞に描かれた動作・事象にどの程度影響されるかによって影響性が変わってくることを示した。さらに、影響性は、通常、ある出来事によって得られて維持されている新しい状態についての具体的な概念であり、Kratzer (2000, Beavers 2011 から引用) はこれを“target state”と述べた。 .

Beavers (2011) はさらに、述語による項の変化に基づき影響性のヒエラルキーを提案した。



(86) 「影響性」のヒエラルキー



述語による項の変化に基づく (20) の影響性のヒエラルキーにより、変化の状態は様々になる。

(20)B の Non-Quantized 変化述語による結果より、shatter のような(20)A の Quantized 変化述語による結果のほうが強い影響を受けている。したがって、可能な結果は限られている。また、(20)D の Unspecified for Change の述語変化に比べ、(20)C の Potential for Change の可能な結果には種類の制限がある<sup>17</sup>。

ter-構文で「影響性」を被る項は主語に位置する要素である。上述したように、ter-構文は di-構文と共に、能動文の meN-構文から書き換えることができる。つまり、ter-構文の主語に位置する要素は能動文の目的語に一致する。能動文の主語が動作主である場合、目的語は動詞で描かれた動作によって影響を受ける、つまり英語では“patient”という意味役割になる。

「影響性」は、この“patient”と強く関わっている。“patient”のプロトタイプについて Washio (1997) は以下のように提案した。

(21) Washio の“patient”の4つのプロトタイプ

非動作主<sub>1</sub>：

動詞は自動詞で、語彙的に特定の指定はない。談話や語用論上で、“影響を受ける”ものとして解釈することができる。

非動作主<sub>2</sub>：

動詞は語彙的にそれが何らかの影響を受けていることを指定されている；したがって、状態の変化を起こすことがあるが、どのように変化するかは指定されていない。

<sup>17</sup> Beavers (2011) が扱っている述語変化については検討の余地があるが、本稿では触れない。

### 非動作主<sub>3</sub> :

動詞は語彙的に影響を受けていることを指定されている。その影響を受けて、実際に状態そのものが変化するかどうかは指定されていない。しかし、その状態が変化した場合、特定の方向に変化することが指定されている。

### 非動作主<sub>4</sub> :

動詞は語彙的に状態が特定の変化を受けることを指定されている。それゆえ影響を受けて、実際に状態が変化する。

非動作主に変化が起こるかどうかが、またどのように変化するかについて特定の指定がないので、非動作主<sub>1</sub>と非動作主<sub>2</sub>は1つのグループにできる。このグループは **Strong Resultative** を形成する。一方、非動作主<sub>3</sub>と非動作主<sub>4</sub>は動詞自体に変化を受けるといふ指定があり、1つのグループにまとめることができる。このグループは **Weak Resultative** を形成する。

鷲尾は、結果構文ベースの他動詞を **Weak Resultative** と述べ、動作動詞で示される動作の結果を指定する。日本語はこのタイプしか認めない。一方、英語は、**Strong Resultative**, **Weak Resultative** の両方が可能である。

他の言語学者は、「結果」“resultatives”を「完成」“accomplishment”または「達成」“achievement”として扱っている。

「結果」“resultatives”の分析を通して、「結果」“resultatives”や「完成」“accomplishment”に関して、Levin and Rappaport (1995) は以下のように示している。

- (22) a. 結果は、常に状態の原因となる変化について説明している。したがって、活動動詞に続く状態を表す XP には、変化によってもたらされた結果の状態という解釈しかない。Activity と状態の変化の間の因果関係は、変化の達成として eventuality の解釈から導かれる。このような「結果」は英語にしか見られない。
- b. 結果 XP が既に達成した、または完成した動詞に追加された場合は、状態変更をさらにエンコードするという解釈に過ぎない。このような「結果」は英語と日本語の両方に見られる。

上で扱っている「結果」は、ter-構文で使われるとき、副詞のように使われる場合が多い。「結果」そのものは形容詞で表されている。この副詞のような機能は、Tenny (1994)

も述べている。

副詞の追加は、終了状態のステータスを"強化"することによって動詞の意味を推移することができる (Tenny, 1994)。具体例を以下に示す。

- (23) a. mencuci (sampai) bersih,  
me--洗う まで きれい  
(きれい (になるまで) 洗う。)
- b. dicuci (sampai) bersih  
di-洗う まで きれい  
(きれい (になるまで) 洗う。)
- c. tercuci bersih  
ter-洗う きれい  
(きれいに洗った。)

(23) a-c は、meN-動詞, di-動詞, ter-動詞の直後に bersih 「きれい」 を付けて副詞の働きをしている。意味の上では、現実の出来事 (24) (27) だけでなく、抽象的な意味 (25) (26) (28) (29) にも使われる。

ter-構文の例文：

a. ter-V+副詞

- (24) Debu-debu di kolong ranjang dan sela-sela lemari sudah ter-sapu bersih.  
埃 で 下 ベッドと 間 棚 すでに ter-拭く きれい  
(ベッドの下や棚の間にゴミやほこりがきれいに拭いてあります。)
- (25) Dua kecamatan disana ter-sapu bersih oleh tsunami, menyusul gempa.  
二つ 地区 あそこ ter-拭くきれい によって津波 ~の後 地震  
(あそこの2つの地区は地震後の津波にさらわれた。)
- (26) Indonesia ter-sapu bersih di China.  
インドネシア ter-拭くきれいで中国  
(試合で) インドネシアは中国に一掃された。)

b. 副詞＋ ter－V

(27) Rumah itu bersih ter-sapu dan rapih ter-atur.

家 そのきれい ter-拭くと きちんと ter-整理する

(あの家はきれいに掃いてきれいに整理されました。)

c. meN－構文で表す：

(28) China berhasil menunjukkan kedigdayaannya di cabang olah raga bulutangkis

中国 成功した 示す 無敵 で 部 スポーツバドミントン

di Hongkong dengan menyapu bersih semua gelar.

で 香港 meN-さらう きれい 全て ランキング

(中国は香港でのバドミントン試合で無敵を示し全てのランキングをかつさらった。)

d. di-構文で表す：

(29) Lima emas ditawarkan di arena badminton, kesemuanya disapu bersih

五つ 金 di-提供するで 部 バドミントン、全て di-拭く きれい

kontingen China yang diketuai pemain nombor satu dunia, Lin Dan.

代表団 中国 関係代名詞 di-リードする 選手 番 一 世界リン・ダン

(バドミントンの分野で提供された五つの金が、そのすべてが、林丹、世界一の選手にリードされた中国の代表団にさらわれた。)

Talmy (1991) は、ここで扱っている意味構成要素“clean”は特定の語彙項目“wash”に関連付けられている「implicature」の一種であると主張している。この意味構成要素は、おそらく“wash”という語彙項目が含意している内容だと思われる。これを Talmy のメー  
トニミー拡張と言う。

#### 4. ter-構文と “kena” の関係

Kridalaksana (1992) は、明確に“kena”を含む構文（「kena 構文」）を「受動」のカテゴリーに入れている。

- (30) Kakinya ter-antuk batu.  
 足 ter-躓く 石  
 (彼は足がつまづいた。)
- (31) Amin kena pukul  
 アミン kena 殴る  
 (アミンさんが殴られた。)
- (32) Saya kena marah tadi  
 私 kena 怒る さっき  
 (私がさっき怒られた。)

“kena” は自由形態素なので、単独で特定の意味を表せる。辞書では、その意味が次のように書かれている：(i) 影響を受けた；(ii) (何か) を経験する；(iii) 苦しむ；(iv) (何か) と関わる、(v) 当たったという意味である。以下では、“kena”構文が ter-構文とどのように関わっているのかを考察する。

#### 4.1 “kena”を含意している ter-構文

例文：

- (33) Kami hampir kena tipu seseorang yang mengaku dari sekolah.  
 私たち 危うく 当たる 騙す 誰か 関係代名詞 自白する から 学校  
 (私たちは学校からのものであると主張されて騙された。)
- (34) Banyak sekali penggiat di LBH yang kena ancam.  
 多い とても 活動家 で 法律扶助協会 関係代名詞 当たる 脅す  
 (法律扶助協会の活動家の多くは脅された。)
- (35) 2.314 warga Sumut kena gigit hewan rabies.  
 住民 スマトラ島 当たる 噛む 動物 狂犬病  
 (2314 人のスマトラ島の住民が狂犬病の動物に噛まれた。)
- (36) Tanaman yang sudah siap panen rusak kena injak gajah.  
 植物 関係代名詞 すでに 整い収穫する 壊れた 当たる 踏む 象  
 (収穫する準備が整う間に、植物は象に踏みつけられた。)
- (37) Kena tilang oleh polisi lalu lintas...  
 当たる 交通違反罰金 による 交通警察

(交通警官に交通違反の罰金を課された。)

- (38) Perempuan sering kena serangan jantung daripada pria.

女 よく 当たる 発作 心臓 より 男

(女性が心臓発作の可能性が高い (男性より)。)

- (39) Dua jembatan ambruk kena banjir.

2 橋 崩壊する 当たる 洪水

(二つの橋が洪水で壊された。)

上記の(33)–(36)の kena 構文を ter-構文に交替させると以下のようなになる。

- (40) ter-tipu

- (41) ter-ancam

- (42) ter-gigit

- (43) ter-injak

(40)–(43)の ter-構文を以下の(44)–(47)の実例で見よう。

- (44) Banyak petugas kesehatan ter-tipu telepon gawat darurat.

多い 保健当局 ter-騙す 電話 緊急

(多くの保健当局は、緊急電話でだまされた)

- (45) TKW asal Karawang ter-ancam hukum pancung di Riyadh.

女性労働者 出身 地名 ter-脅す 斬首刑 でリヤド

(カラワン地方から出稼ぎの女性労働者がリヤドで斬首刑にすると脅かされた。)

- (46) Payudara lecet akibat ter-gigit si bayi.

乳房 すりむく 結果 ter-噛む 赤ちゃん

(乳房が赤ちゃんに噛まれてすりむけた。)

- (47) Gaun yang dikenakannya ter-injak hingga robek.

ガウン 関係代名詞 身につける ter-踏む まで 裂ける

(着ていたクリスチャン・ディオールのガウンが踏まれて裂けた。)

(33)–(39)の kena 構文及び(44)–(47)の ter-構文は、次の Siewierska (1984) の受動概念を満たす。(i) 受動の主語は対応する能動文の直接目的語である。(ii) 対応する能動

文の主語は受動文に付加詞の形で現れるか、または出現しない。(iii) 動詞に受動のマークを付ける。

従って、上記の *kena* および *ter-* は次のような類似点を共有している：

- a. OVS 語順
- b. 非動作主の焦点
- c. 動作主の任意の存在
- d. 一人称、二人称の制約がない

*ter-*構文と *kena* 構文の交替を上で見た。また、能動文は、*di-*構文、*kena* 構文、*ter-*構文、さらに *ter-*接頭辞を付けた *kena* 構文の *terkena* 構文に書き換え可能である(48)–(52)。

(48) *Komodo menggigit dua petugas Taman Nasional.*

コモド me-噛む 2 役人 国立公園

(コモドが国立公園の二人の役員を噛んだ。)

(49) *Dua petugas Taman Nasional di-gigit (oleh) Komodo*

2 役人 国立公園 di-噛む (によって) コモド

(国立公園の二人の役員がコモドに噛まれた。)

(50) *Dua petugas Taman Nasional kena gigit (oleh) Komodo*

2 役人 国立公園 kena 噛む (によって) コモド

(国立公園の二人の役員がコモドに噛まれた。)

(51) *Dua petugas Taman Nasional ter-gigit (oleh) Komodo*

2 役人 国立公園 PREF-噛む (によって) コモド

(国立公園の二人の役員がコモドに噛まれた。)

(52) *Dua petugas Taman Nasional terkena gigit (oleh) Komodo*

2 役人 国立公園 PREF-噛む (によって) コモド

(国立公園の二人の役員がコモドに噛まれた。)

このような類似点もあるが、*ter-*構文と *kena* 構文の間には相違点もある。*kena* 構文は以下のような *ter-*構文にはない特性をもつ。

1. “*kena*”は「動詞に描かれた動作によって非動作主が何らかの影響を被る」という意味が生じ、結果は非動作主にとって望ましくないものである。

2. “kena”は全ての形態のマーキングから自由でなければならない。
3. “kena”の直後は動詞ばかりでなく名詞も来られる((37)―(39))。

ter-構文には *kena* が密接に関わっていることを見てきた。上述したように、*kena* の意味自体に「影響性」<sup>18</sup> が強く感じられる。この「影響性」の有無という観点も、日本語の受動文研究には伝統的に存在する（川村 2003）<sup>19</sup>。

#### 4.2 “kena”を含意していない ter-構文

1 節の ter-構文には *kena* が密接に関わっていた。2 節では「影響性が強い」*kena* の意味が現れない ter-構文を見ていこう。「影響性」は意味的な性質である。意味的な側面から探る前に、統語的な側面から検討しておこう。

Keenan and Dryer (2007) は、基本的な受動 (Basic Passive) と、そこから逸脱した受動 (Non-basic Passives) という形で「受動」の本質を探ろうとしている。Non-basic passives としてあげられているものは、(i) 動作主を示す句を伴った受動 (passives with agent phrase), (ii) 非他動詞からの受動 (passives on non-transitive verbs)、(iii) 複他動詞からの受動文 (passives on ditransitive verb phrase)、(iv) 非被動者以外の主語を伴った受動 (other passives with non-patient subject) の 4 つである。さらに、受動文は他動詞を統語的・形態的に制限したものだと述べた。

ここで Keenan and Dryer が述べた「他動詞の制限」というのは、多くの言語の受動文が他動詞の厳格な形態上の変化で構成されているということである。しかし一部の言語では、他動詞と共に受動的な固有助動詞が使われている。この (固有) 助動詞を付けない受動文を“Strict Morphological Passives”と呼ぶ。

#### 4.3 Strict Morphological Passive

他言語の厳格な受動形態素は殆ど接尾辞を付けることによって形成される。しかしあくまでこれは一般の原則ではない。例文(53)を見てみよう。

- (53) a. Petugas kebersihan me-numpuk sampah di pingir jalan.  
 用務員 me-積み重なる ゴミ で 道端  
 (用務員が道端にゴミを積み重ねた。)

<sup>18</sup> 「影響性」は他の先行研究では「被影響」「利害」「受影性」など様々な用語で扱われている。

<sup>19</sup> さらに「影響性」は「有情」「無情」に関係付けられていた。



b. Sampah di pinggir jalan di-tumpuk (oleh) petugas kebersihan.

ゴミ で 道端 di-積み重なる (によって) 用務員  
(ゴミが道端に用務員に積み重ねられた。)

c. Sampah di pinggir jalan ter-tumpuk.

ゴミ で 道端 ter-積み重なる  
(ゴミが道端に積み重ねられた。)

正式には、上記の di- と ter- の受動文は、動詞の接頭辞の選択に関して異なっている。厳密に言えば、非文法的ではないが、ter-構文は簡単に動作主を選択することができない。意味的に、前者と後者は完全に同等ではない。(53) は中立的な受動で、能動の言い換えで形成される一方、(53c) は、意味的にははっきりと完了形である。つまり、正常に完了した動作が表示されている。動作はほとんど自発的であり、動作主が軽視されている。

## 5. まとめ

この章では、ter-構文は di-構文と交替できる場合もあるし、交替できない場合もあることを示した。直接的に di-構文と交替できない場合、使役マーカ-kan 接尾辞と結合された di-構文 (di-kan 構文) と交替する。交替できるものは、意味構造として「主語そのものが動作や行為を受ける」ということであり、さらにその動作・行為は「働きかけ」と考えられ、それによって対象になるものには変化が生じ始める。この「(動作の) 働きかけ」までは、di-構文で表わされる。また、それによってもたらされた「(変化) の結果」が持続している場合、ter-構文で表される。つまり、「結果の継続」は di-構文と ter-構文の相違点と考えられる。したがって、di-構文は「変化の受動文=Passive of Change」である一方、ter-構文は「継続的受動文=Passive of State」と表せる。「変化の受動文」がまず成立して、そこから結果が生じ、さらに持続している場合、「継続的受動文」が派生する。

## 第6章

### 結論

これまで述べてきたことから得られた結論は、以下のようにまとめられる。

1. 結果構文は実際ヴォイスの観点から考えれば中立である。しかし、「動作主の必須削除」という点では受動文と類似している。結果構文では、構文上の主語は patient としての役割なので、結果構文全体はその patient の状態を述べている。一方、受動文では agent そのものが構文上に表されない。Keenan (1985) も Basic Passive を定義するときに、動作主補語を受動文の特性から除外している。
2. 受動文のマーカ―は動作性の減少を表すものとして使われる。di-構文、ter-構文、ke- -an 構文は全て受動マーカ―を持っているが、メインの働きは動作性の減少であると考えられる。

“oleh”の恣意的な使用は、その減少をより明確に示している。特に、統語的に制限される ke- -an 構文は、“oleh”が使えないため、「影響性」が深く感じられる。

従って、di-構文、ter-構文、ke- -an 構文は全てが受動マーカ―を持っているが、動作性の grade は異なっている。
3. ter-構文と結果構文の用語を組み合わせると、インドネシア語は「非動作主前景の結果構文」といえる。
4. 日本語の「られる」の意味は「脱意図性」にあり、当該の行為が自分の意図からではなく行われることを述べる表現である。意図的な行為は通常望ましい結果をもたらすのであるから、これをあえて非意図的に描くということは、望ましくない出来事であったり、意外な出来事であったりすることを表すために用いられやすいことは十分想像できる。
5. 英語の受動表現に‘be 動詞’が付加される現象などから、受動の機能の一つとして、スル表現をナル表現に変えるということが言われている。「行為」から「変化した状態」に変えるという機能である。そして、この「変化した状態」には「結果」という概念が含意されていると言える。
6. 「主体の背景化」という概念がナルの意味の広がりや機能を考える上での鍵に

なる。ナルを有標的に使用するという事は、何らかの意味で「主体の関与を否定している」。

7. Hopper and Thompson (1980) の「他動性の意味特徴」と di-構文、ter-構文、ke-  
-an 構文を対応させると次のようになる。

	他動性が高い	他動性が低い	di-	ter-	ke- -an
A : Participant (参与者)	参与者が2人またはそれ 以上	参与者が1人	2人	1人	1人
B : Kinesis (動作性)	動作	非動作	動作	非動作	非動作
C : Aspect (アスペクト)	完了	非完了	非完了	完了	???
D : Punctuality (瞬時性)	瞬間	継続	???	瞬間 継続	???
E : Volitionality (意志性)	意志的	非意志的	意志	非意志	非意志
F : Affirmation (肯定性)	肯定	否定			
G : Mode (モード)	現実	非現実	非現実	現実	現実
H : Agency (動作主性)	動作主の能力が高い	動作主の能力が低い	高い	低い	低い
I : Affectedness of O (受益者(物)の被動作性)	受益者(物)が全体的に影 響を受ける	受益者(物)が影響を受けない	全体	全体	全体
J : Individuation of O (受益者(物)の個別化)	受益者(物)が高度に個別 化されている	受益者(物)が個別化されてい ない	非個別 化	個別化	非個別 化

8. 被動作主が動詞句の主語にある構文、つまり受動文は被動作主の視点から述べているので、動作主と関係があるパラメーター(参与者、動作主性、意志性)の値は低い、受益者(物)の被動作性の値は高い。

## 参考文献

- Alwi, Hasan, et al. 1998. *Tata Bahasa Baku Bahasa Indonesia: Edisi Ketiga*. Jakarta: Balai Pustaka.
- Beavers, John. 2011. On Affectedness. *Natural Language and Linguistic Theory* 29, 335-370. Paris: Springer.
- Chaer, Abdul. 1993. *Gramatika Bahasa Indonesia*. Jakarta: Rineka Cipta.
- Comrie, Bernard. 1976. "Aspect". *Cambridge Textbook in Linguistics*.
- Croft, William. 1990. "Possible Verbs and the Structure of Events." In Tsohatzidis, S.L (ed.), *Meaning and Prototype: Studies on Linguistic Categorization*, 48-73. London and New York: Routledge.
- Croft, William. 1994. "Voice: Beyond Control and Affectedness." In Barbara Fox, Paul J.Hopper (eds.), *Typological Studies In Language 27: Voice: Form and Function*, 89-117. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Departemen Pendidikan dan Kebudayaan. 1991. *Kamus Besar Bahasa Indonesia (Edisi Kedua)*. Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan.
- Dixon, R.M.W. and Alexandra Y. Aikhenvald. 2000. "Introduction." In: Dixon, R.M.W. and ` Alexandra Y. Aikhenvald (eds.). *Changing Valency: Case Studies in Transitivity*. 1-28. Cambridge: Cambridge University Press.
- Givon, Talmy. 1982. "Transitivity, Topicality, and the Ute Impersonal Passive." *Syntax and Semantics* Volume 15, 143-150. Academic Press.
- Givon, Talmy. 1994. "The Pragmatics of De-transitive Voice: Functional and Typological Aspects of Inversion," in Givon (ed), *Voice and Inversion*, 33-44. Amsterdam: John Benjamins.
- Gorys, K. 1980. *Tata Bahasa Indonesia*. Indonesia: Nusa Inda.
- Haspelmath, Martin. 1990. "The grammaticalization of Passive Morphology." *Studies in Language* 14(1). 25-72. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Haspelmath, Martin. 1994. "Passive Participles Across Language". In Barbara Fox, Paul J.Hopper (eds.), *Voice: Form and Function, Typological Studies in Language 27*, 151-177. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Hopper, Paul J., and Sandra A. Thompson. 1982. "Studies in Transitivity." *Syntax and Semantic*

- Vol.15. New York: Academic Press
- Jacobsen, W. M. 1992. *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Keenan, Edward L. and Matthew S. Dryer. 1985. "Passive in the world's languages." In Timothy Shopen (ed.), *Language typology and syntactic description, vol. I: Clause structure*, 243-281. Cambridge: Cambridge University Press.
- Keenan, Edward L. and Matthew S. Dryer. 2007. "Passive in the World's Languages". In *Clause Structure, Language Typology and Syntactic Description, Vol. 1: Clause Structure*, 325-361. Second Edition. Cambridge University Press
- Klaiman, Miriam. 1988. "Affectedness and Control: A Typology of Voice Systems." In Masayoshi Shibatani (ed.), *Typological Studies In Language, Vol.16: Passive and Voice*, 25-83. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- Kratzer, Angelika. 2000. "Building Statives." *Berkeley Linguistic Society* 26. University of Massachusetts at Amherst
- Kridalaksana, Harimurti. 1992. *Pembentukan Kata dalam Bahasa Indonesia*, Jakarta: PT.Gramedia Pustaka Utama.
- Kuroda, S. Y. 1979. "On Japanese Passive." *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Kenkyusha.
- Langacker, Ronald W. 1976. "Non-Distinct Arguments in Uto-Aztecan." Berkeley: University of California Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav. 1995. "Unaccusativity, At the Syntax." *Lexical Semantic Interface*. MIT Press, Cambridge.
- Nedjalkov, Vladimir P. 1988. "The Typology of Resultative Construction." *Typological Studies in Languages* 12. Amsterdam: John Benjamin.
- Parsons, T. 1990. "Events in the Semantic of English." *A study in Subatomic Semantics*. Cambridge/Mass.,MIT Press.
- Perlmutter, David M. and Paul M. Postal. 1974. *Lectures in Relational Grammar*. LSA Summer Institute, University of Massachusettes, Amherst.
- Perlmutter, David M. and Paul M. Postal. 1977. "Toward a universal characterization of passivization." *Proceedings of the Third Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society*. 394-429. Berkley: Berkley Linguistic Society.

- Purwo, Bambang Kaswanti. 1989. "Diatesis di dalam Bahasa Indonesia: Telaah Wacana." *Serpih-Serpih Telaah Pasif Bahasa Indonesia*. 345-411. Yogyakarta: Penerbit Kanisiusus.
- Rizki, Andini. 2004. インドネシア語における受動文の形態と意味（日本語との対照）. 名古屋大学文学部文学研究科修士論文.
- Ryuichi, Washio. 1997. Resultative, Compositionality, and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics*, Vol 6, Issue 1: 1-49. Netherlands: Kluwer Academic Publisher.
- Schachter, Paul. 1977. "Reference-Related and Role-Related Properties of Subjects". In *Syntax and Semantics 8: Grammatical Relations*, ed.by Peter Cole and Jerrold M. Sadock. 279-306. New York: Academic Press
- Siewierska, Anna. 1984. *The Passive, A Comparative Linguistic Analysis*. London: Croom Helm.
- Sitindoan, G. 1984. *Pengantar Linguistik dan Tata Bahasa*. Indonesia: Pustaka Prima
- Song, Nam Sun. 1993. *Thematic Relations and Transitivity in English, Japanese, and Korean*. Center for Korean Studies Monograph 17. University of Hawaii.
- Sutedi, Dedi. 2006. 「インドネシア語の「di-動詞」構文と日本語の「(ら)れる」との対照研究」. *Journal of Japanese Language and Culture* (2), 303-339. 日本言語文化研究会
- Talmy, L. 1991. "Path to Realization: A Typology of Event Conflation." *Berkeley Working Papers in Linguistics*. 480-519.
- Tenny, Carol L. 1994. Aspectual Roles and the Syntax-Semantic Interface. *Studies in Linguistic and Philosophy*. Netherlands: Kluwer Academic Publisher.
- Wanner, Anja. 2009. "Deconstructing the English Passive." *Topics in English Linguistics*;41. Berlin: Walter de Gruyter
- Washio, Ryuichi. 1997. "Resultatives, Compositionality and Language Variation." *Journal of East Asian Linguistics* Vol.6. 1-49. Netherland: Kluwer Academic Publisher.
- Wittek, Angelika. 2002. "Learning the Meaning of Change-of-State Verbs: A Case Study of German Child Language." *Studies on Language Acquisition* 17. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Yamamoto, Mutsumi. 2006. "Agency and Impersonality." *Studies in Language Companion Series*. Amsterdam: John Benjamin Publishing Company.
- 井上和子. 1976. 『変形文法と日本語（上）—統語構造を中心に』 大修館書店
- 岩田彩志. 2009. 「2種類の結果表現と構文理論」『結果構文のタイポロジー』 171-216. ひつじ書房

- 上原聡. 2009. 「タイ語における結果構文」『結果構文のタイポロジー』 365-406. ひつじ書房
- 奥津敬一郎. 1996. 「日本語と英語の受身文「坊ちゃん」の分析」『日本文法論』 ひつじ書房
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』 くろしお出版
- 影山太郎. 2000. 「自他交替の意味的メカニズム」『日英語の自他の交替』 ひつじ研究業書（言語編）第 20 巻. 33-69. ひつじ書房
- 影山太郎（編）. 2001. 「自動詞と他動詞の交替」『日英対照動詞の意味と構文』 12-38. 大修館書店
- 影山太郎. 2009. 「語彙情報と結果述語のタイポロジー」『結果構文のタイポロジー』 101-139. ひつじ書房
- 笠間伸次郎. 2009. 「テーマ企画：特集受動表現」『語学研究所論集』 第 14 号 15-31. 東京外国語大学
- 亀井孝. 1996. 『言語学大辞典』 第 6 巻述語編. 三省堂
- 金水敏. 2004. 「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」『日本語の分析と言語類型、柴谷方良教授還暦記念論文集』 47-56. くろしお出版
- 工藤真由美. 1990. 「現代日本語の受動文」言語学研究会の論文集その 4. 『ことばの科学』. 47-102. むぎ書房
- 佐藤琢三. 2005. 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院
- 柴谷方良. 1982. 「ボイス：日本語と英語」『講座日本語学』 10. 明治書院
- 柴谷方良. 1997. 「言語の機能と構造と類型」『言語研究』 第 112 号, 1-32. 日本言語学会
- 須賀一好・早津恵美子. 1995. 『動詞の自他』 ひつじ書房
- 高橋太郎. 1976. 「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』 pp.119-153. むぎ書房
- 田中真理. 1991. 「インドネシア語を母語とする学習者の作文に現れる「受身」についての考察」『日本語教育』 109-122.
- 高見健一. 1997. 『機能的統語論』 日英語対照による英語学演習シリーズ 4. くろしお出版
- 張威. 1998. 『結果可能表現の研究—日本語・中国語対象研究の立場から—』 日本語研究叢書 10. くろしお出版
- 角田太作. 1991. 『世界の言語と日本語』 くろしお出版
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味』 第 I 巻. くろしお出版
- 寺村秀夫. 1984. 『日本語のシンタクスと意味』 第 II 巻. くろしお出版

- 中川裕. 2004. 「自動性・他動性とアイヌ語の動詞」 千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 Vol.53, 1-18.
- 仁田義雄 (編). 1991. 「文法的なヴォイスと語意的なヴォイスの関係」『日本語のヴォイスと他動性』 211 - 232. くろしお出版
- 丹羽一弥. 2005. 『日本語動詞述語の構造』 笠間書院
- 早津恵美子. 1990. 「有対他動詞の受身表現について—無対他動詞の受身表現との比較を中心に」『日本語学』 9-5, 67 - 83. 明治書院
- 早津恵美子. 2000. 「現代日本語のヴォイスをめぐって」『日本語学』 臨時増刊号 19-4. 17 - 26. 明治書院
- ホラス由美子. 2006. 『インドネシア語レッスン初級1』 スリーエーネットワーク
- 本田親史. 2003. 「漢語動名詞の使役交替」『人文論究』 53 (1) : 145-157.
- 益岡隆志. 1982. 「日本語受動文の意味分析」『言語研究』 82 号, 48 - 63.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法』 .くろしお出版
- 町田健. 1989. 『日本語の時制とアスペクト』 NAFL 選書 9. アルク
- 松岡邦夫. 1990. 『インドネシア語文法研究』 大学書材
- 松下大三郎. 1928. 『改選標準日本語文法』 352-362. 紀元社
- 宮腰幸一. 2009. 「日英語の周縁的結果構文—類型論的含意」『結果構文のタイポロジー』 217-265. ひつじ書房
- 宮島達夫. 1985. 「ドアをあけたが、あかなかった—動詞の意味における〈結果性〉—」『計量国語学』 第 14 卷第 8 号, 335 - 353.
- 村上三寿. 1989. 「動詞のうけみのかたちにおける結果相」『ことばの科学』3, 135 - 145. 言語学研究会編. むぎ書房
- 湯浅章子. 2003. 「'Volitionality' と 'Responsibility'—インドネシア語における 3 種の受動表現 'di-'ter-'ke-an」 甲南女子大学研究紀要・文学・文化編 40 号, 85 - 91.
- 湯浅章子. 2006. 「日本語、インドネシア語のナル型受動構文」シリーズ言語対照第 2 卷『言語に現れる「世間」と「世界』」. 105-126. くろしお出版
- 吉川武時. 1976. 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』 228-327. むぎ書房
- 吉成祐子・プラシャント・パルデシ. 2010. 「非意図的な出来事における他動詞使用と責任意識—日本語・韓国語・マラーティー語の実態調査を通じて—」岸本秀樹 (編) 『ことばの対照』 175-189.くろしお出版



林青樺. 2009. 『現代日本語におけるヴォイスの諸相—事象のあり方との関わりから. くろしお出版

鷺尾龍一. 2006. 『事象と言語形式』筑波大学現代言語学研究会編. 三修社